…旅人…

きっちょむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

…旅人…

【Ｎコード】

Ｎ５１１０Ｓ

【作者名】

きっちょむ

【あらすじ】

主人公は女性ですが、かなり男勝り。いや、むしろ男に近い…；その時代を後世に残すために記録する事を仕事にしており、情報を集めながら旅を続けています。その中でいろんな武将に会っていく…という話です！

流浪人《壱》（前書き）

こんにちは！きっちょむです！

このお話は三國無双を基（モト）にしています。基本的に歴史（演技）に沿って書いて行こうと努力していますが…、何せ大雑把で飽きやすい性分なもので…途中から少しずつ変わっていく＆ａｍｐ；不定期更新かも（いや、確実にそうなるでしょう）；悪しからず…。

・オリキャラは女性
・出てこないキャラ有り
・キャラが壊れたりしちゃうかも…
・若干史実と異なる

これでもよろしければ、是非読んでやっていただければ嬉しいです！初めて書くので稚拙かと思いますが、どうぞお付き合い下さい。

流浪人《壱》

建安

中国では漢王朝は地に落ち、群雄割拠する戦国時代が幕を開けた。

ある者は大義の為に…
ある者は覇道の為に…
ある者は信じる者の為に…

人は己が目指す世を築かんと、天下を争っていた…
そんな時代…―。

厳しい冬が終わり、春がそこまで近づいている季節になった。
その日の天候は晴天。

一人の旅人が、中国の中央よりやや北に位置する河南の町に足を踏み入れた。

辺りを見渡せば、商う店にも人がおり、田畑は奇麗に耕されている。
街に行き交う者達は、ある程度の身なりを整え、貧しいながらも笑顔と活気に満ちている。
街は生活するに困難でないくらいは潤っているのだろう。
そんな中、旅人の薄汚れた格好は浮いていた。

旅人の身長は成人男性の平均である。風貌は庶民の衣服を纏い、頭からは足首までである麻布を被っていた。そのため、顔をよく見ることはできない。
旅人が纏っている衣服と麻布のいずれも年期が感じられるものであった。しかし、風化しつつあるその衣服や麻布に、傷は一つも見えない。

旅人は街中を迷うことなくさっさと歩いていく。町行く人々は、そんな旅人を見るなり次々と道を開けていく。彼等は、旅人の薄汚れた姿を見て道を開けているのだろうが、理由はそれともう一つ…。

旅人の左手には、長い槍か戟(ゲキ)のようなものが持たれていたのである。棒の部分は朱色に塗られていて、旅人を一見すれば最も目立つ場所だ。先端は布で巻かれていたため、槍か戟か…どちらか判断はつかない。しかし、どちらにしても武器であることに違いはない。…町行く人々は、旅人が人を殺す道具を所持していると見て避けて通っているのだった。
これこそ、どれ程間隔が空いているのかは分からないが、この町の人々が戦と距離を置いているという証拠だろう。

それに気づいているのかいないのか、旅人はただ街中を坦々と歩いていく…。

ふと、露店が並ぶ道の右手に、酒場の看板を見つけ旅人は足を止めた。その酒場の外観は、他の店よりも何故か暗いように見えた。

今はまだ午前。
酒を飲むには些か早過ぎる。だが、旅人は看板を確認するやいなや、その酒場へと入って行った。まだ酒場が開くには早いはずだが、ここの酒場は空いていた。
主人は、入って来た旅人を笑顔で迎え入れた。
店の中には既に、客が数人いる。このような時間から飲んでいる人々だ。まともな者は少ない。さらっと見回しただけだが、旅人にはそのように感じられた。

主人の景気のいい挨拶を受け、ゆっくりと歩きだす旅人を、数人の客達はじっとりと見ていた。ほとんどの者は、ただの興味本位で見ているわけではないようだ。

旅人は最も目立たない、光の当たらない場所。一番奥の椅子に腰掛けた。
そして、左手に持っていた長物を直ぐに手の届く距離の壁に立てかけた。そして、麻布で隠れていて見えなかったが、背中に背負っていた獣の皮に包まれた荷物を、木のテーブルの上に置いた。その時、それなりの質量があるような音が辺りに響いた。
それと同時に、客の男達が旅人の荷物を一斉に見る。その理由は、ただ音に驚いて反応したためではないということは言うまでもないだろう。

しかし、そんな周囲の異様な目をも知ってか知らずか、旅人は右手

を挙げて店の主人を読んだ。

「はいはい。ご注文は？」

主人は先程と同様に、笑顔で旅人の傍に寄ってきた。近くで見ると、その表情はどうも胡散臭いものだった。

「…主人。

少し尋ねたいことがある。」

旅人に対し、主人は笑顔を見せつつも、口元に驚きを見せた。しかし、すぐ先程までの表情へと戻った。

「何でしょう？」

「…まだ世は乱世のはずだが…ここの街はえらく穏やかなようだな。何か理由があるのか…？」

旅人の声は男性にしてはやや高く、女性にしてはやや低い。

旅人は被っている麻布をとることなく、そして隣に立っている主人を見るわけでもなく話を続けた。

「えぇ、この土地は曹孟徳様が統治して下さってから戦もなんですよ。」

「…その割には、この酒場にいる者達は血気盛んな者が多いようだが…。」

旅人がそう言うと、いつの間にか背後に近づいていた男に…鉄拳を見舞った……。

それは一瞬の出来事だった…―

旅人の鉄拳を受け、男は仰向(アオム)けに倒れ込む。

よく見れば、この男は旅人が店に入った際に、出口付近に座っていた男だった。何故この男が旅人の後ろから近づいていたのか…。その理由も、旅人はだいたい察しているようだ。

勢いよく踏み込み殴ったことで、旅人の頭に被っていた布がとれていた…―

―…旅人は女であった。

年齢は二十代半ばだろうか。

髪は黒く長い。おそらく腰近くまであるだろうその髪を、緩いみつあみにしている。正確な長さは、着ている麻布でよくわからない。

顔はだいたい整っている。鼻はすうっと通り、肌の色は少し白く見える。と言っても、奇妙な程ではなく、女性らしい位だ。見方は人によるだろうが、儚気(ハカナゲ)な美人と言ったところだろう。ただ、身長が成人男性の平均程あるため、そのようには見えないが…。

目は大きくややつり目である。

だが、眠いのか癖なのか、彼女の目は普通に見開いておらず、どこかぼーっとしているような目だ。さらに睫毛は長く、妖艶な目だと言えばそのようにも見えるが、眼光は普通の女とは全く違う。男を見下しているその眼光は、他の追随（ツイズイ）を寄せ付けないようなものだった。そのため、顔が整っている女性であることを、店の中にいた人々は忘れて驚き、絶句していた。

もちろん店の主人も例外ではない。主人は、何が起こったのか直ぐに理解できず、絶句したまま佇（タタズ）んでいた。先程までの嘘くさい笑顔は見る陰もない…。

「…あー。
殺気を出して後から近づくからそうなるんだ…。」

旅人は、自分に非などないかのように、倒れている男を見下し、呆れた様子でそう言った。その声に抑揚などはなく、実に冷たい響きを持っている。

男が倒れている位置から見て、男が旅人に近づいていた距離はおよそ七尺（一尺約三十？）だ。
男が殴られるまでに一体なにがあったのか詳しく説明すると、後ろから殺気を出して近づいてきた男に気づいた旅人は、勢いよく立ち上がり、椅子が倒れるより先に踏み込み、倒れたと同時に男の顔面に鉄拳を見舞ったのだ。

無惨に倒れている男の鼻は、旅人の拳の形に凹んでいた。拳の形と言っても、どうも違和感がある形だ。

旅人の右手を見ると、メリケンが嵌められている。違和感がある拳の跡はそれが原因のようだ。旅人の右手に嵌められているその銀色の金属は、鈍い光を湛えていた。

その銀色の金属を見て、暫し呆然としていた店の主人は我に返った。

「お客さん！なんてことを…！」

主人は焦りながらそう叫んだ。
それに対して、旅人は完全に無反応である。最早聞こえていないかのようである。旅人は、主人の怒鳴り声を聞いてから数秒置いた後、再び主人を見ることなく、倒れた男を見下したまま口を開いた。

「…主人。
血気盛んな者がいることは悪いとは言わないが…、統率がイマイチじゃないか？」

「な…！何をおっしゃっているんです？」

「…役人はなにもしないから…、だから自分達で自分の生活を守らなければいけないんだろう？
…大方、ここにいる奴らは主人が雇った物取りや…。又は～……賊

……。」

「！！」

主人は図星を突かれ、焦りを隠せない様子だ。
そう。この店にいる男達は皆物取りなのであった。どうやら全てを知っていて彼女はここにやって来たようだ。

旅人の言葉に動揺していた主人であったが、旅人が主人を見ていない事をいいことに、急に辺りを見回して周りの男達と頻(シキ)りに目を合わせてコンタクトをとっている。

「…情報があったんだよ。主人…。」

…旅人は倒れている男を見て話し続ける…

「…自分はある人に恩を返さなきゃならん。で…、自分はあんたらにあるものを還してもらうためにきた。」

主人からのコンタクトを受けた店にいる男達が、少しずつ旅人を囲むように動く…

「…還してもらえれば何もする気はない。だから考えて動くことだ。」

「くっくっくっ！
あんたも考えて行動するべきだったな！」

そう主人が声を上げた瞬間、周囲を取り囲んでいた男達が一斉に旅人に向かって飛び掛かってきた。

「…交渉決裂だな……」

旅人は無表情のまま、それに即座に反応し、壁に立て掛けていた長物を手に持った。そして、荷物を持ち、それを置いていた木製のテーブルを長物で持ち上げ、まず右の男達目掛けて吹っ飛ばした。

さらに、次は切り掛かってきた左の男達の斬撃を、倒れている男を使い防ぐ。

男の悲鳴が店に広がる…。血が床を濡らしていった。

最後に、残った前方にいる主人と男達数名に向かって、自分の盾にした血だらけの男を投げ付けた。

驚くべきはそれが行われた速さである。

旅人は前方の男が怯んだ隙に、長物で左へ横倒しにし、出入口から外へ逃げ出した……―。

・・・・・・・・・・・・・・・

旅人は酒場から電光石火の逃亡を図り、とりあえず店からの脱出は成功。しかし、別に撒いたわけではない。怪我をした者、気絶した者はほんの僅(ワズ)かだ。それにしても、何故旅人は逃げているのか…これについては後ほど説明する…。

旅人の後ろからは、先ほど酒場で酒を飲んでいた連中が罵声と共に追いかけてきている。
旅人達の追いかけっこを、街行く人々は悲鳴やら何やら騒いでいたが、旅人は焦る様子もなく無表情で走り続けた。

だいたい酒場より三軒目の店の前で、旅人は後ろをチラリと振り返り、次なる策を考え始めた。その時……―

ドンッ！！

図らずも人と打つかってしまい、しりもちをついた。

「あ。すまない。急いでいたもので……」

ここでもまた旅人は、何語とも無かったかのような無表情で謝った。そして、彼女はぶつかった相手を確認する間もなく、直ぐにまた走り出そうと腰を上げた。…すると、相手から肩を掴まれた。

「御婦人。見る限り、追っ手に終われている様子。よろしければ手助け致しますぞ。」

打つかった相手は、そんな旅人に打つかられたことを咎めることなく、穏やかな口調で言った。

旅人は驚いて、初めて相手の姿を確認する。旅人が打つかったのはどうも武人のようだった。その武人は全体的に緑色の着物を纏っており、体格はかなり大柄だ。右手に持っている偃月刀の刃には、龍の模様が入れられていた。
そして、一番目に入るのは…胸まである立派な黒髯。

その男に対して、旅人は少し戸惑った。なにせ、見知らぬ大男だ。こんな恋愛漫画にありそうな出会い方をして、尚且つ助けてもらうというのは、無関心でうたぐり深い旅人には、いささか裏があるとしか思えなかった。

しかし、これは助けてもらえるならばそうしたいところである。

なにしろ、迷っている暇はないのだ。後ろからの足音はどんどん大きくなってくる。

しかし、それでも自分一人でなんとかできるだろうという唯我独尊的な部分のある彼女は迷っていた。そして、なんやかんや断ろうかと口を開いた時…

旅人の生気の薄い、半開きの目の色が変わった…。
目の前の武人が誰か、旅人は検討がついたようである。

「―……そうしてもらえるか？貴殿が助太刀してくれるなら心強い。自分も闘いましょう。」

「御婦人が？
いいや。貴女は逃げたほうがよい。拙者一人で十分でござる。」

「あぁ。
貴殿なら…そうだろうな。」

「なに？」

「自分は恐らく、貴殿を知っている。理由は…アレを片付けてから話します。」

そう言って、旅人は親指で後ろを指した。
旅人の直ぐ後ろには、酒場にいた男達が立っていた…。

旅人に対して疑問を持った武人だったが、旅人が何かを企み、自身を嵌(ハ)めようとしているようにはどうしても見えなかった。なにより、目の前にいるのは…背がいくらあったとしても、女である。武人には、これを捨て置くことはできない。しかも、ぶつかったのは疑いようもなく偶然。
そのため、武人は最初の言葉を撤回することなく動くことに決めた。ただし、この見知らぬ婦人の実力を見ることにしたため、彼女に下がっていてもらうという当初の予定は撤回した。
武人は、根拠のない勘だけに頼らず、まず相手を知る手段として、実力を知ることにしたのだ。

「…承知した。では、御婦人の力を見せてもらうとしよう。」

「ああ。よろしく。」

旅人はそう言って、肩にあった武人の手を軽く叩き、退かした。
そして武人は偃月刀を構え、旅人は後ろを振り向き、手に持ってい

た長物を……下に置いた。

……。

流浪人《壱》（後書き）

まず、最後まで読んでいただきありがとうございます！
いかがだったでしょうか…？

これからどうなるのか…私自身わかりません（笑）！！
どうぞ次回も読んで下さいね。

《弐》

旅人は武器を下に置いた後、その場に立ったままだ。何かしようとしている風でもない……

それにしても、この状況下で武器を手放すなど有り得ないことだ。なんといっても、今さっき武人と共に闘う約束をした本人である。先程の流れからして、ここは旅人の秘められた力を示さねばならないところだ。まだ正体の明かされていない長物を使って…。

「…御婦人。正気か？…」

武人は、堂々と己の一歩前に手ぶらで立っている旅人に声をかけた。武人のツッコミはもっともである。一瞬…旅人の行動をガン見たまま、固まってしまった追っ手達や取り巻き達もそう感じただろう…。武人は、非常にマイペースな旅人の行動を、さすがに黙って流す訳にはいかったらしい。

「…自分はいつでも正気だ。闘いにコレは必要ない。邪魔になる。」

旅人の言うコレとは、地面に置いた長物のことだ。

「…御婦人…素手で行くつもりか…？…」

「…あぁ。」

旅人はそう言い、手首を回した。

……何で！？長物は！？

と思う方々は多いだろう。

では前回保留にしていた、旅人が酒場から逃げた理由も含めて説明しよう。

…実はこの旅人、長物は使えないのだ…。使ったとしても、使い方が闘いに馴れていないうえに雑なのだ。先程の酒場での戦闘においても、力任せでなんとかしたようなもので、決して長物を使いこなした訳ではなかった。酒場での旅人の戦い方を武芸者が見れば、使うというよりは振り回しているだけ…というふうに映っただろう。それは旅人本人も自覚している。

あの時の旅人の思考はこうだ。

『多勢に対し自分しかいない、不意打ちは何度も通用しない。啖呵を切ったはいいものの、多勢に囲まれたら厳しいものがある。その上、力技にも限界がある…。』

…この結果から導き出された答えが『逃亡』だったのだ。

しかし、そんな旅人も一人で旅を続けてきたのだ。護身術くらいは身につけている。外に逃げたのも、別に足に自信があってそうした訳ではなく、考えあってのことだった。

「足は引っ張らない。
…それでは、お先に……―」

旅人の様子に困惑し、心配そうに見ている武人をよそに、旅人が先に前に出て行く。

刃物を持った男達がそれに対して警戒する……―
なにせ、わざわざ武器を置いて、素手でこちらに近づいてくるのだ。警戒もするだろう。それを見た旅人は、ニヤッと不適に笑った。

「…ふふっ。女相手に物怖じするのか？よくそれで物取りをやってこれたな。」

旅人の初めて見せた無表情以外の顔は、相手を皮肉った笑みだった…。

これに黙っている男達ではない。完全に頭に血が上ったようで、急に旅人に飛び掛かってきた。

「！」

旅人がそれに反応する前に、武人がすかさず旅人の前に出て、掛かってきた男達を数人返り討ちにした。敵である男達は、度肝を抜かれたという顔だ。

当初の武人の予定では、『旅人の力をとりあえず見る』というものだったが、男達が掛かってきたと言う切羽詰まった状況になっても、全く動こうとしない旅人を見兼ね、身体が勝手に動いてしまったのだった。

それにしても男達を倒した武人の一撃…。それはまさに、一振りで薙ぎ倒したと言えるものだった。
武人の力は尋常ではなく圧倒的だったのである…。

その武人の行動に対し、旅人はさも予定通りといわんばかりに、何も言わずに立ったままである。…しかし、男達が我に返り、まだこちらに掛かってこようとしているのを見て、スッと武人の前へ出た。

「…食らえ…。」

旅人は、いつの間にか懐(フトコロ)から出した、手の平程の包みを、男達に向かって投げつけた。布を包んだそれには赤い粉が入っており、衝撃が加わると包みが開いて中の粉を撒き散らすようになっていた。

「「ぐあ”〜!!」」

旅人の投げた包みは一人の男の顔に命中し、赤い粉が辺りに散らばった。
それをもろに吸い込んだり、目に入ってしまった者達は悲鳴をあげた。彼らの顔は、苦痛に歪んでいる。

男達の様子を見て、武人はさっと袖で鼻を塞ぎ、旅人に向かって叫んだ。

「御婦人…これは…！？」

「…必殺…唐辛子玉…。

…当分の間はこれでもつでしょう。少し、付き合ってもらえるか？」

旅人は軽く振り向き、武人に答えると、目を押さえながらのたうち回っている男達の間を何事も無かったかのように歩いていく。

ふと、旅人は何かを思い出したのか足を止め、もう一度武人のほうへ振り向いた。

「…申し訳ないが、自分の長物を持ってきていただけますか？」

そう言って、また旅人は前を向き歩きだす。

武人は唖然として固まってしまった。しばらくこの現状と展開に困惑しきった顔をしていたが、会って間もない奇妙な雰囲気を持った旅人に、興味が沸いたというのもまた事実…。武人は、旅人の得体の知れない獲物を拾い上げ、彼女の後ろ姿がさほど小さくならないうちに、大股で後を追い始めた。

・・・・・・・・・・・・

「さて、御婦人。
幾つか質問させていただいてもよいだろうか？」
武人が一点を凝視して旅人に問うた。
「…なんでしょう？」
武人の畏(カシコ)まった物言いに、旅人も一点を凝視し、そのように返す。
「まず、これはどういう事だ？」
男達をなんとか撃退し、旅人が歩いて来たのは先程の酒場だった。
店の中は机や椅子が倒され、血だらけで俯(ウツブ)せになっている男や、木製のテーブルの下敷きになって気絶している男が数人…。　通常の昼近くの酒場の状態ではない。
武人は入口付近で足を止め、この惨状(サンジョウ)を凝視し、旅人に尋ねている。
「…これは…ここにいた客だ。」
旅人は、武人と同じく入口で足を止め、同じ場所を凝視して答えた。
「そのただの客が何故このような状態になっているのかを尋ねているのでござる…！」

少し眉間にシワを寄せ、武人は隣に立つ旅人を見遣った。
たが、それに気づいているのかいないのか、旅人は無言で、店主が待機していた左手の奥の場所へ迷わず入って行った。そこは酒が幾つも揃えて置いてあり、壁に打ち付けて作ったであろう棚の上には、たくさんの器が並べられている厨房。

「御婦人…！」

武人の質問に対し、無視に徹している旅人を問い詰めるように、武人は少し声を荒げた。
しかし、旅人はまだ何かを探すように棚や台の下を覗いている。やがてカウンター辺りで立ち止まり、旅人は一息ついた。そしてようやく疑問を投げ掛けてくる武人に答えようと、足を止めて目を上に向け、考えだす。尋常でない程マイペースな人間である…。
武人は、旅人を睨むようにじっと見ている。

「あれは……
……
…なんやかんやで自分がやった…。」

…旅人は説明しようと少しだけ考えた。考えたが…その結果説明するのが面倒になったのか、彼女は適当に答えた。これに武人が納得するはずはなく、

「何故？返答次第では拙者の立ち位置は変わる。」

偃月刀で軽く地面を叩き、そう言った。

その行動から、武人を適当にあしらうことはできないと察したのか、またはそんなことは関係なく、ただ答えやすい質問だったからか、旅人は視線を初めて武人と合わせ、話しはじめた。
ちなみに筆者は後者だと思う。

「…今、自分は世話になっていた人から頼み事を承っていてな。」

更に話し続ける…

「どうもその人は、この酒場で物取りにあってしまい、大切な物を取られてしまったと言う。調度、世話に報いねばと思っていた矢先だったので、自分はそれを聞き、取り戻しにここへ来たのです。」

旅人の話から、武人はその時の盗まれた状況や、旅人がここで何をされそうになったのかという状況をだいたい頭に想像できた。今までの経験からだろう。
そして、直ぐに旅人には非がないだろうと予測した。もちろん、彼女が嘘をついていないとも限らないが、目の前の婦人は、その部類の人間ではないという確信の様なものが武人にはあったのだった。

「なるほど。御婦人は義に篤い御仁でござったか。
…にしても、御婦人は何故単身で参られたのか？
それ程に己の武を誇示していた訳ではないようだが……。」

「…自分は一人旅をしている。いざとなればどうにでもなると思ったのです。
…実際、どうにかなったでしょう…？」

旅人はかなり結果主義のようだ。武人はそれに対してツッコもうかと思ったが、それよりも旅人の言葉に引っ掛かる事があった。

「…御婦人は…もしや…？…」

武人はどうやら、旅人は『御婦人』と呼ぶには失礼に当たることだと気づいたようだ。
つまり、結婚をしていない独り身であるとわかったのである。

「はい。
…ですが、御婦人で結構。娘扱いされる年齢でないことは自分がよく知っています。」

「失礼致し申した…」

旅人の気丈な態度に、本当に気にしていないのだろうことは理解し

たうえで、武人は謝った。
ここまでの段階で、彼女の表情は余り変化しないことを武人は理解していた。また、彼女自身、自分の事にすら興味がないのではないかという疑問も生まれていた…。

しばらく旅人は会話の最中もなにやら奥で忙(セワ)しなく捜し物をしていて顔は見えなかった。そのため、武人は彼女の声のトーンで表情の変化を判断し続けた。
一方旅人は、ただただ捜し物を捜している。武人はそれを、何かを考えるでもなくじっと見ていた。

「…では……―。」

ある程度間隔を置いて、旅人は武人に背を向けながら声をかけた。

「…申し訳ないが、そこに倒れている者の処置をお願いできないだろうか。何分…、自分は破壊することはできるが、修復するのは…。戦に馴れている者であると見込んで、お願いいたします。」

その言葉を聞いて、武人は我に反った思いがした。このような事を目の前にして、全くその考えが頭に浮かばなかった自分に、武人は驚いたのだった。
そして、戦に馴れるとは、斯(カク)も常識的・人道的行動を忘れてしまうものかと、眉間に深くシワを寄せた。
もちろん、武人は武人であって医者ではない。だが、少しくらいは応急処置の知識はある。武人は、男達が倒れている場所へと近づき、

改めて彼らを見た。

…倒れている男達は全部で六名。確かに軽症で気絶しただけの者はほとんどだろう。しかし、頭を強く打っているため、何かまずいことになっているかもしれない。そして、血だらけの者は実に危険な状態にある。……いや、最早手の施しようはないだろう…―。何刀かの刀傷を負い、そこから血が溢れ出ている。武人の経験からいって、これ程血を流せば…助からない。

「…助けられそうもなし…か…？」

空気を察したのか、旅人は手を休め、武人の方を見ながら尋ねてきた。

「…一人は…。」

武人が血だらけの者を見ながら答える。

「…仕方ないな。」

旅人は武人の視線の先を見て言った。
その言葉はいろんな理由を含んでいるようだった。

『乱世だから』

『あれだけ刺されたのだから』
『自分が生きる為だったから…』

それを感じ取り、武人は別に咎めようとは思わなかった。むしろ、武人は自分自身、咎める側にないことを理解していた。武人である以上殺しを否定する矛盾はできないのだ。例え、殺した理由を追求したとしても。

「…他の者は問題なさそうか？」

更に旅人は尋ねてきた。今度は倒れている男達をじっと見たままで。

「そうだな。外傷はない。医者ではない故よく分からぬが…、内に損傷があるかもしれぬ。動かさん方が賢明であろうな。」

武人はその立派な髭を武器を持っていない手で撫でながら言った。

「…では放置しよう。役人が来ては後が面倒になる。特に貴殿が…。」

旅人はいつの間に見つけたのか、汚い布袋を片手に奥から出てきてそう言った。
外見上、やったのは武人だと思われる可能性は高く、証言してもらうにしても面倒であることを言っているのだろう。

「捜し物は見つかったようだな。」

その様子を見て、武人は立ち上がった。

「…お蔭様で。
床の下に今まで奪った物が隠してあった。」

そう言って旅人は足を出口に向ける。

「そうか。
…ところで御婦人…―
いや、婦人でないのではこの呼び方はできんな。名を聞いても構わぬか？」

旅人は武人の問い掛けに足を止め、『あぁ…そういやぁ言ってなかったな』という横顔を見せた。そして次に、クルッと武人の方を見て口を開いた。

「…呂嬰（リョエイ）と申します。」

名乗った後包拳し、軽く頭を下げた。
その所作は、実にゆっくりとしていて気品に溢れている。この時ば

かりは、彼女が汚れた衣服を身に纏い、唯我独尊の性格であることを忘れてしまった武人であった。
武人はふと我に返り、自らも名を名乗ろうと包拳した。

「呂嬰殿か…。拙者は…」「関羽雲長殿でしょう？」「！？」

武人こと関羽が名乗る前に、旅人こと呂嬰はその名前を口にした。

「…そういえば、先程も拙者を知っていると…。」

「…職業柄…自分はいろんな人に世の中の出来事を聞いて回っている。
貴殿の噂はその為に知っていたのです。」

「…呂嬰殿の職とは？」

「…歴史を記録することです。まぁ、今は金にならないがな。」

口ではそう言うものの、呂嬰の目は楽しそうである。

「素晴らしいな。」

「…ここで会えたのも何かの縁。自分は政治や戦を中心に伝書を作成しているのだが、次の戦について教えていただけないでしょうか

？確か…今貴殿は曹操の下にいるとか…。」

呂嬰はここで初めて、自分から関羽を知ろうという疑問を投げ掛けた…。

《弐》（後書き）

微妙なところで切ってしまったような気が…；

まだまだ続きます！

《参》

「…うむ…。
…如何にも。拙者は今、曹操殿の下にいる。」

そう言う関羽は目をやや伏せ、どこか淋しげで苦しんでいる様であった。呂嬰(リョエイ)は具(ツブサ)にそれに気がつく…が、何も気づかないかのような態度で在り続けていた。彼女の美徳として、相手との距離を絶妙に保つというものがあるのだった。

「戦の情報とは…どのような情報なのだ？」

少し間を置いてから、関羽はスッと目を呂嬰に向けて尋ねた。流石に切り替えが早い。先程の様子は一瞬で消え去っていた。

「…近々始まる戦の有無やその理由…。それと…曹操軍の主要な人物について…。」

「些(イササ)か、呂嬰殿に話すには…まだ会って間もな過ぎるのではないか？」

呂嬰の言葉に、関羽は少し怪訝そうである。なにせ今日会って間もない女に、自ら所属する軍の大事な情報を教えろと言われているのだ。関羽の言っていることは最もと言える。それを呂嬰も理解して

いるらしい。

「…確かにその通りだ…。だが、人の出会いは一期一会。自分の場合は人よりそれが多い。…縁があって出会えたのだから、次の機会を待つ理由があるでしょうか？」

実に的を射た、説得力のある言葉である。しかし、関羽はその言葉の中に引っ掛かるものを感じた。そして、関羽はその疑問をぶつけた。

「…貴殿は…
友がいないのか？」

—…まぁ…アレだ。
非常に直球過ぎて失礼過ぎやしないかと思われるかもしれないが、かなりいい質問だ。ここで関羽を弁護するが、彼はちゃんとこの疑問をぶつけるか否か迷った。失礼だとわかっていたが聞いておきたかったのだ。

そして、先の呂嬰の言葉では、出会い…そして別れる事を前提として話していた。自分から一期一会と言い、そちらの方が多いと言っている事から、まず友はいない発言をしたようなものである。

「…あぁ～…。
言われてみればいないな…。」

普通の人なら憤りを覚えそうだが、それすらどうでもいいようである呂嬰は、長物を右手に持ち替え、左手で頭を掻いている。
それを見て、時に無関心過ぎるというのは切なくなるものだと関羽は思い、そして軽く溜息をついた。

「曹操殿には恩がある故、情報を漏らすようなことは出来ぬが…、次の戦は河北の袁紹と…ということになろうな。」

「ほう…。袁紹か…。」

呂嬰はつまらなそうな態度でいたが、関羽の言葉にそれは一変した。口元も目元も変わらないが、声を聞く限り非常に興味がそそられたようだ。少し声のトーンが上がったために察知できる。

「…情報をさりげなく漏らして頂き、感謝します。」

その様子からまさかの嫌みを含んだ返しに、関羽は固まってしまった。原因を考えた結果…、先程の言動は少々この鉄仮面の女性の気に障っていたことが分かった関羽は、堪らず笑みを浮かべた。

「貴殿はなかなか面白い。」

「…。」

呂嬰は、何について関羽が言っているのか理解できないという様子である。目を普段より細め、顎を少し上げた。
その二十半ばの女性の行動は、幾らか年上の関羽にはよほど微笑(ホホエ)ましいらしい。片手で髭を撫でながら、含み笑いを浮かべている。

「……気味が悪い笑みはやめていただけるか。言いたいことがあるなら言ってもらおう…。」

呂嬰にとって、それは気味が悪いものでしかなかったようだ。声のトーンがいつもより下がっている。

「いや…、失礼致し申した。呂嬰殿は顔には出ないが、随分と目や声で語るものだと思ったのでな。」

少しの間で、関羽は呂嬰を大分理解したようだ。
そして呂嬰は、そう言う関羽の方が面白いではないかと思った。

「…そんなことは初めて言われた…。」

呂嬰は、少し考える素振りを見せて言った。とりあえず、過去の経歴に同じような事を言った者がいたか検索したのだろう。ヒットはなかったが…。

…そうしてなんと無しに二人が話していると、呂嬰はやや外が騒がしくなってきた事に気づいた。

「……。」

そもそも出口の近くにいた呂嬰は、話を打ち切り無言で戸の方を見遣った。

「役人が来るには早いな。」

関羽もそれに気づき、戸の方へ近づく。
確かに話し込んでしまったかもしれないが、役人が来るには早過ぎる。開きっぱなしにしていた戸から、様子を見ようと呂嬰は外へ出た。そして声のする方へと目を見張る…

…すると…、露店が並ぶ街の奥の方から、馬に跨がった武将がこちらにやって来るのが見えた。行き交う街の人々はその武将に道を譲り、頭を下げている。
名のある武将なのかと呂嬰は記憶を辿る。だが、今までの記憶の中にそれに似た外見の有名武将は思い当たらない。いや、名前さえ聞けばヒットがあるだろうが、会ったことのない武将を外見から思い出そうとするのが無理な話だ。だから、まず街の人々から挨拶を受けているくらいだから曹操の兵なのかと考える…
呂嬰の記憶力は並外れたものがあるのだ。
そうこうしてるうちに武将は目の前近くまで来た。その時、やはり

外が気になるのか後ろから関羽も出て来た。

「何事だ？」

そう尋ねる関羽に、呂嬰は顎で武将が来る方向を指した。

それと同時に、突然馬に跨がった武将は呂嬰の目の前で馬を止めた。何事かと呂嬰は目を数回瞬(マバタ)く。そして武将はこちらを見ると、近くまで寄ってきた。周囲の人々の目は呂嬰に向けられた。それを横目で確認し、今日は図らずも注目される日だなと思う呂嬰である。

その武将は、近くで見ると随分素晴らしい装いをしていた。これをなんと表現すべきなのか分からないが、一般兵が身につけるようなものではないとだけ言っておこう。

武将の手にはこれまた関羽と同じく偃月刀が握られていた。

「勝手に出歩かれては困ると何度も言っているだろう。」

心底呆れたように、現れた武将は言った。

呂嬰はこの武将が誰に言っているのか分からずに、とりあえず武将の顔を見たまま、次の反応を待っていた。少なくともこちらを見ているのは間違いないが、呂嬰には心当たりがないのだ。

すると、自分の右斜め後ろにいた関羽が呂嬰の隣に足を進めてきた。

「おぉ。張遼か…。
すまない。どうも暇を屋敷の中で過ごすのは居心地がよくなくてな。
」

まさか関羽の知り合いだったのかと驚き、呂嬰は隣の関羽の顔を見上げる。
見上げて再確認したが、関羽はかなりデカイ…。呂嬰が１７６くらいだから、関羽は２００を超えているだろう。この状況で、呂嬰はそちらにも驚いた…。

張遼と呼ばれた男に陳謝する関羽は、申し訳なさそうであった。
察するに、張遼は関羽を捜しにきたと見える。彼は馬から降り、関羽と言葉を何度か交わした。二人は呂嬰の事は目に入っていないかのように話していたが、張遼がふと、呂嬰に気づいた。
ずっとこちらを見ていたはずのに今気づくとは、この男はかなり天然なのかと思う呂嬰。正直、彼女にそう思われたらジ・エンドである…。

「関羽殿。この御婦人は？」

張遼は呂嬰に軽く会釈をし、関羽に尋ねた。
…関羽は『御婦人』という単語に若干気まずそうだ。だが、呂嬰自身が全く気にしている様子がないため、張遼には屋敷に戻ってから伝えようと思う関羽であった。

「あぁ。先程町で会った呂嬰殿だ。」

「…初めまして。」

関羽の紹介に合わせ、呂嬰も張遼に対して包拳し軽く会釈をする。

「これは失礼致した。
私の名は張遼、字を文遠と申す。」

自ら名を名乗らずに、相手の名を尋ねた事を詫びてから、張遼も包拳し名を述べた。

「…張遼殿…ですか…。」

張遼と名乗った男をじっとりと窺(ウカガ)い見た。また今日は大層武人らしい武人と会うものだと、呂嬰は思うのだった。
呂嬰は関羽から張遼の名を聞いた時、一人の男の経歴が頭に浮かんでいた。

「…呂布軍にいた頃から武に秀でていた方ですね。」

包拳していた左手を麻布の中に仕舞い、呂嬰は言った。

「！？」

「あぁ…；この呂嬰殿は、史書を記す職についているらしい。だから、お主の事も知っているのだろう。」

呂嬰に対して驚き警戒さえ見せている張遼に、関羽は呂嬰の職を伝えフォローする。

「…ほぅ…。」

張遼はその言葉に顔の強張りを解いた。そして、感心したように呻いた。

「確か…、呂布殿の下にも一人、そういった職の者が尋ねてきたが…、
まさか女性の者もおられたとはな。」

「……。」

呂嬰は黙った。固まったともとれるような表情である。その表情になる前に、一瞬だけはっとしたように見えた。

「…呂嬰殿？」

張遼は気づいていないようだったが、関羽はそれに気づき、不思議そうに声をかける。
呂嬰は問題ないと答えるかのように関羽を一瞥すると、張遼に目を戻した。

「…是非、張遼殿にもお話を聞きたいところだ。
…しかし、そろそろお暇(イトマ)させていただかねばならない。」

「何処か、行く宛てがあるのか？」
驚いた表情をし、張遼が尋ねる。

「…先程、関羽殿から次の戦の情報を貰ったので…。
袁紹邸に向かおうかと思っています。」

「！
何故袁紹の下に行くのだ？ここは殿の下へ行かれる方がよいではないか。」

「…いや。
…出来れば、自分は曹操殿を敵側から見たいのです。」

「…何故…。」

「…乱世の奸勇を…
第三者の目から見て記すためだ……―。」

呂嬰の雰囲気がわかった。歴戦の猛者である彼等には、彼女を取り巻くそれが殺気に近いことに気づく。
しかし、張遼・関羽はそれ故に比較的に冷静である。

「…殿の敵側に立てば、第三者の目線から見れぬのではないか？」

その手の輩は見飽きるほど見てきたであろう張遼がそう切り返す。

「…近くにいるよりはいい。…敵側から見ることで、憎しみのその先に行けるかもしれないから…。」

しっかりと張遼を見据えて呂嬰は語る。その目からは意志の固さが滲み出ている。

「その先……。」

張遼はその言葉に意味深さを感じた。武の極みを目指す彼だからこそ、その言葉に引っかかったのだろう。彼は呂嬰の言葉の真意を聞きたかったようだが、呂嬰は雰囲気をもとに戻し、口を開いた。

「…まぁ、そういうことだから、自分はここを発つ。もう会うこと

はないとは思うが…」「いや、そんなことはない。」

「？」

暫し黙って話を聞いていた関羽が口を挟んできた。

「最早、我等は友。友ならばまた次も会う機会があるだろう。」

「……。」

「一度あることは二度。二度あることは三度あるというしな。」

関羽、張遼の言葉に呂嬰は黙る。黙って彼等を見て、何か思うところがあったのだろう。右手に持っている長物の尖端をゆっくり関羽、張遼の順に指し、眉を上げて目を細めた。

今まで、呂嬰に会った者が友になりたいなどということはなかった。基本的に無表情で無愛想。不思議な雰囲気で可愛いげがない…年増（トシマ）な女。そんな呂嬰と友になろうとする者はいなかったのだ。だが、彼等は呂嬰に興味を持ち、酒を酌み交わし語り合いたいという思いが出てきていたのだった。

「…実に面白い方々だ。
では…またいずれ…。」

そう言い、呂嬰は無礼な行為をしたにもかかわらず、包拳もせずに二人の間を通り過ぎた。本日通ったばかりの道を引き返すために…。

関羽や張遼はその後ろ姿を微笑みながらただ見送る…。

呂嬰は、彼等の視線を背中に受けて歩きながら、彼等は自分の人生にとって大切なキーパーソンになるのではないかという考えが頭を過ぎった。その時はただ一瞬、頭を過ぎった程度に過ぎなかったため、呂嬰は気にもとめなかったし、今日という日がキーパーソンだったのだとしか思わなかったのだった…―。

《参・伍》

呂嬰は街の外へ出てから、長物と一緒に持っていた奪還物をまじまじと見た。

「…取り返したはいいものの…」

これの奪還を呂嬰に願い出た人物は、呂嬰にそれを頼んで直ぐにどこかへいなくなってしまっていた。
呂嬰はその人物をよく知っているため、別に捜そうなどと思っていないし、この奪還物を返す必要はないとも分かっていた。

…とりあえず呂嬰は中身の確認をする。
奪還物の中を見ると、そこには五つの書簡が入っていた。

「……。」

呂嬰はふぅっとため息をついた。呂嬰は中身も何なのか分かっていた。何せ、依頼人は命より大切な物だと言っていた物なのだから…。
さて、気になる奪還を頼んだ人物。それは…

「…師匠も世話が焼ける…。」

彼女の師匠であった…―。

呂嬰も人の子。誰かに教えてもらわねばこのような仕事はできない。まず、このような仕事が有ることすらも知らなかっただろう。呂嬰の師は年がいっている割に放浪癖が激しく、一カ所に住み着くなど有り得ない。そんな師と彼女はずっと共に旅をして史書の作成をしてきた。ただし、それは呂嬰が一人前になるまでの話。ある程度学び、独り立ち出来るようになれば離れて史書の作成に当たる。その方が効率がいいのだ。そのため、呂嬰の他にも師の弟子はいる。今頃どこかで召し抱えられ、史書の作成に明け暮れていることだろう。だが、呂嬰はその弟子達に会ったけとはない。と言うのも、彼女は師が最後の最後に弟子にした人物だからだ。師はその頃、既に弟子を全て独り立ちさせ、自分の仕事に専念しようとしていた。そんな時に呂嬰を弟子にしたのだ。弟子にした理由は師、本人しか知らない。呂嬰はあの性格なため、聞こうとしなかった。興味がないのだ。

呂嬰が独り立ちして数年経ったある日、滞在先で偶然師に会い、命より大切な史書が入っている袋を酒場で盗まれたと聞いた。さすがの呂嬰もそれには驚愕した。史書がどれ程大切な物か分かるからこそだ。だから、奪還という依頼を二つ返事で受け入れたのだった。

しかし、翌日にはその師はどこかへと旅立っていた…―。『後はよろしく』という置き手紙だけを残して……。

というのがこれまでの経緯である…。弟子が弟子なら師匠も師匠ということだろう…。

まぁ、師からしてみれば弟子にその史書を奪還してもらい、続きを書いてもらえればそれでいいのだろうが…。

「…絶対に突き返す。」

いつかはそれを貰うとしても、まずは師匠に会って文句の一つも言いたいところ。呂嬰はそれを固く胸に誓い、河北の袁紹の元へと足を運ぶことにした。奪還した書簡を自分の皮袋に仕舞い、外していた麻布を頭に被せて…　―。

《参・伍》（後書き）

はい！まず、此処まで読んでくださった方！本当にありがとうございます！
とりあえず一区切りというところまで来ましたね～。
この参・伍って何だ？って思う方もいらっしゃると思います。説明しましょう！これは一言で言うと…付け足しちゃった…ということです！もっと単語で分かりやすく言えば…ミス…ってやつですね！すいません…。でも、この手段結構使える（笑）って思っているのでまた使うかもしれません！
では！まだまだ続きますので次も読んでやって下さい。

麗人《壱》

『一八四年
黄巾の乱
一八九年
少帝即位後
董卓首都洛陽を征圧
一九〇年
反董卓軍結成
董卓献帝を長安に移す
一九二年
董卓養子の呂布により殺害
劉表孫堅を殺害
一九六年
曹操献帝を擁して都を許都へ
一九七年
袁術淮南で皇帝を称する
一九八年
曹操呂布を絞首刑に処する
』

カチャ……―

旅人は、読んでいた一本の書簡を綴じ、大切に皮の袋にしまった。
その書は深緑が味のある竹で出来ている。綴じられている一本一本の竹は、色や大きさがまちまちで、有り合わせの物で造られているようだ。まぁ、よく見なければ気づかない程度ではあるが…。
そして、一本一本を繋ぐ紐にはほつれや汚れがある。かなり使い込まれているのだろう。

纏っている麻布の下から袋を背負い、一見して、外から荷物が見えないようにし、呂嬰は立ち上がった。

今、呂嬰は河北へ続く道の途中である。
右手と左手に土手があり、土手の下には田畑が広がっている街道。
呂嬰は右手のそこに腰を下ろし、酒場で奪還した布袋に入っていた書簡を読み返していた。

現在、呂嬰は河北の袁紹の元へ向かおうとしている。先の訪れた村で出会った武人・関羽より、河北で戦が始まりそうだと聞いたからだ。
また、張遼からは殿の元へということを言われた。しかし、呂嬰はそれを断り、お互いに別れを告げて去ってきた。

呂嬰が断った理由…それの一つは、曹操を気に入ってはいなかったから。
過去の彼のやり方の内に、気に入らないものがあったためでだった。
乱世の奸勇・曹操とは、奸勇と言われるだけのことをしてきたのだ。
呂嬰はその噂を前々から知っていた。もちろん、ただの悪漢というだけではなく、彼の才能を示す噂もあったし、今後絶大な力を手に

入れるであろうことは、今までの活躍から明らかだ。だからこそ、『乱世の奸勇』の次の一手を、敵側から見てみたいと思った。…というのもまた断った理由の一つ…。そちらの方が、第三者として曹孟徳を理解できると考えたから。

「あんた、何処に行くんだい？この先は賊が出るって話だよ。」

休憩も終わり、そろそろ歩きだそうかとした時、田畑の中から呂嬰に声をかける者がいた。
そちらに目を向けると、年のいった農夫がいた。

「…袁家に用がある。」

「はぁ～！袁紹様のとこまで行くつもりなのかい。長旅だねぇ。」

「…えぇ。この道を真っすぐ行けば袁家に着くと思うんだが、合っているだろうか？」

「あぁ。そうだよ。
しかし、また近々戦があるとか…。旅をしているなら、長居はせんほうがいいよ。」

「…ありがとう。
では、これにて…。」

「山賊だけには気をつけてな。」

農夫の言葉を背に受けて、呂嬰は歩き出した。

別に呂嬰にとって山賊など、恐るるに足らないものだった。正直、殺されてしまうことなどどうでもよいと考えている節があり、そこから生まれる行動は、逆に永らえる根源となっていた。また、金や身ぐるみを剥がされることすら彼女にはどうでもよく、襲われそうになったとしてもそれを跳ね退ける力を持っている。そのため、彼女にとって山賊など恐るるに足らない。…むしろどうでもいいのだ。しかし、これは彼女の根本的考え…つまり、本能であって、理性が踏まえられていない。っというのも、矛盾が生じている場面があるのだ。恐らく、お気づきになった方もいるだろう。

…例として、また酒場の時を上げさせてもらうが、彼女は殺される事を避けるため、その場から逃げ出した。なぜなら、あの時は恩人である師の荷物を奪還するという目的があったからだ。

つまり、目的のために彼女は生き続けている。与えられた任務を達成するまでは死ねないと考えているのだ。

「…さて、会わずに越したことはないが…。」

呂嬰は今、大切な目的がある。『歴史を記す』という大きな目的が。だから、いくら金目の物を持ち合わせていないとしても、命と同等の書簡を盗まれてしまえば目的は絶たれてしまう。これだけは避けなければならなかった。

呂嬰は辺りを見回し、人の気配を探りながら歩いて行く。左右に見えていた田畑は木々に隠れていき、林の中へ入った。
ここは河北へ通じる街道。すれ違う人があっても良さそうなものだが、道を行く者は一人もいない。相当山賊の噂が広まっていると見える。

・・・・・・・・・・・・・・・

しばらく林を歩いていたが、結局山賊はでて来なかった。袁家のある町まであともう少しというところで、呂嬰は道に何かを見つけ、足を止めた。それは赤黒い液体が一面に広がっている様だ。

「…血…。」

呂嬰はその液体の近くまで行き、屈んでじっとそれを見た。血溜まりに触れてみればまだ温かく、辺りを見回しても死体はない…。

「…何なんだ…？」

結構天然な呂嬰は、近くに虎でもいるのかと林の中を凝視する。
…すると、左側の林の奥に人がいる気配がした。
関わってはいけないような気がしたが、呂嬰の見たいという本能は止められない。歩いてその方に近づいて行く…

ガサッガサッ…

草や木を足で踏む。
足取りは慎重だが、彼女の性格上…物怖じは少しもしていない。
少し行くと拓けた場所に出た。

「！！」

呂嬰は絶句した…。
そこに在ったのは死体の山…。　山と言っても五、六人だが。
見れば、どう考えてもそれは山賊。平民ではない。
何故死んでいるのか？どうして目につかない場所に運ばれたのか？
誰がやったのか？
間違いないことは、やった者は手練れであり、行われてからそう時間は経っていないということくらいだ。

「……傷口からして…
槍ではないな…。」

最初は犯人が誰かを考えようかと思ったが、余り長居するとマズイと直感が言うため、離れることにした。
呂嬰の直感は良く当たる。旅歴が長かったからか、獣染みている感覚が備わっていた。
呂嬰が踵を返して死体を背にした時、後から視線を感じた。…が、

それに殺気を感じなかった。そのため、呂嬰は振り返りはせずに足を運ぶ。

彼女は、血溜まりを見て足を止めてしまったこと、あの現場を見てしまったことをマズッタかなと感じた…。

・・・・・・・・・・・・・・・

かなり微妙な現場を目撃してしまったが、呂嬰は袁家が近づいてくるうちに忘れていった。なんとも都合の良い記憶力である…。

袁紹の屋敷は大層立派で、門は大きく、門の奥はもちろん、門の前にも屈強な兵達が何人か見張りについていた。そんな大勢の兵が睨みを利かす袁紹の本拠地を尋ねた呂嬰は、目的であるここへの滞在を袁紹に許してもらわねばならない。彼女は、この袁紹にお目通りするまでの難関を、まずどのようにすればよいか心得ていた。

なにせ、ぱっと見た限りにおいて、己の姿は奇(アヤ)しい。汚らしい格好の上に、顔を隠しており、目立つ朱い獲物を持っているのだ…。世間からしたら奇しまれて仕方がない姿である。普通に滞在をお願いしても、門前払いだろう。そのことを呂嬰は過去の経験からしっかりと認識していた。

なので、今までの経験から得た方法である、己の職を言い、一般兵に『是非袁紹殿に力を貸して頂きたい』と言う旨(ムネ)を伝えると、ほとんどの兵はとりあえず己の主人へと掛け合い、呂嬰の望み通りの結果をもたらしてくれた。今回も例外ではない。

呂嬰は門兵に声をかけ、例の方法をとったところ、直ぐに中へと入ることが許された。

大抵の権力者は、呂嬰の職業を好んだ。なぜなら彼らは自分を高く評価し、これを後世に残したいという願望が強いからである。ただし、自分が優秀な人間であることを謁見した際に披露しなければならない。なぜなら、権力者は既に文官の中にそのような人材を持ち合わせている可能性が高いからだ。袁紹程の実力者になれば、それも確率は大幅に跳ね上がる。

…呂嬰はそれが分からないほどのただの馬鹿ではなかった。

兵に案内され中を歩くと、それは外観同様に立派な造りで、呂嬰の目を楽しませた。庭にも手が隅々まで行き渡り、どのような芸術家が指導したか知らないが、実に美しい風景だ。

季節は完全に移り変わり、今は春。池の近くに植えている梅の花を咲かせる木が、春の青空に実によく映えていた。

「…うつくしい…。」

呂嬰はぽつりと感嘆の声を漏らした。感情の起伏が出にくい呂嬰の顔に、驚きが見えている。それ程までに素晴らしいものだった。

正直、今までにもそれなりの屋敷にお邪魔して来た呂嬰であった。が、今回は今までのものを凌駕するようだ。

何となく、庭の梅の木の奥に目をやると、そこに人がいた。恐らく、その人も庭の風景を楽しんでいるのだろう。その人物は、髪を高いところで一つに結っている。遠目過ぎてよく顔は分からないが、着ている物は奇抜な鎧で、色が紫や桃。女性のようにも見えた。が、体型は男で間違いないはずのがっちりしたものだ。

呂嬰は気にはなったが、気になる程度であった。すぐに思考をこれから会う袁紹へと移したのだった。

庭を見渡せる廊下を通り過ぎ、しばらく行くと一際豪勢な広間に出

た。
案内を担当してくれた兵は、広間の奥にどっかりと座る主君に挨拶を述べ、呂嬰を中に入るよう促した。
呂嬰は中に入る前に一礼し、頭に被っていた布をここで外した。周囲はもちろん、案内した兵の驚きようは言うまでもない。
呂嬰は中に入ると、袁紹と適度な距離をとった場所まで歩いた。そして、うやうやしい挨拶は苦手だが、とりあえず片膝を付き、長物を床に置いて包拳をした。

「お目通し頂き、感謝致します。」

「ほう。貴様が記す者か…。まさか女だったとはな。…っにしても汚らしい！字も書けぬ民のようではないか。お前に本当にそれだけの才があるのか疑わしいな！」

袁紹は呂嬰を一瞥するとそう言った。実に侮蔑するような表情だ。周囲の文官や武官達も似たような表情…。完全に嘗められているようだ。

「…見た目と実力は比例しないもの…。遠い日の偉人達もまた、その見た目は汚らしいものであった者は多くあったと聞きます。…聡明な袁本初様はそれを理解し、私をここまでお通しになられたのだと思っておりましたが…。」

そう話す呂嬰の言葉に棘はない。表情同様、声にも抑揚のない人間だ。だが、正直…内心はイラッとしていたらしい。

「う、うむ…；」

袁紹は彼女の話を聞き、彼女が言った『聡明』という言葉に気分をよくしたようだ。しかし、ここですぐに了解するほどまだ納得いかないらしい。いや、周りに示しが付かないと思っているのだろう。あと一押しというところだ。

周囲の文官達はそんな袁紹を見て若干焦っている。どおも呂嬰を気に入らないようだ。自分達と肩を並べる職に、小汚い恰好のしかも女を召し抱えるということが気に入らないのだ。

呂嬰は即座にそれを察知し、また口を開いた…。

《弐》

「名族で在らせられる袁本初様ならば、私の代わりになる優秀な文官方をお持ちでしょう。ですが、御公務も忙しい皆様です。私のような暇な者に、袁本初様含め皆様の優秀な働きぶりを記録させてみてはいかがでしょうか？

数日でいいのです。数日後、記した物をお見せ致します。それを見て字が稚拙であったり、内容が気に入らなければ追い出していただいてかまいません。内容も削除致します。

皆様には私を試すだけの心の広さがあると見込みまして、参上致しております。どうか、お願い申しあげます。」

その言葉に、その場にいた者達が全員納得した表情をした。人によっては驚いている者もいた。それは、この薄汚い姿の女の、度胸・聡明さ・自信を垣間見たからだろう。この女が下賤な者であるはずがないという確信すら芽生えてくる文官もいた。

袁紹が、呂嬰の知と文官達の気持ちの変化に気づいたのかは定かでないが、表情から見て完全に気分をよくしたのは間違いない。

すると、一人の文官が前に出て、袁紹に物申した。

「袁紹様。この者を是非滞在させてみては如何か？」

「おう！田豊！お前もそう思うか！

女。滞在を許可する。この袁本初に力を見せてみよ！」

袁紹は本当にいいように対応すれば使える人間のようだ。

「は。ありがたき幸せにございます。」

呂嬰は最早袁紹の人と成りを掴んだ。ちょろい男だと内心呟いていた。

袁紹に深々と頭を下げた後、呂嬰は田豊と呼ばれた男をちらりと見た。

なるほど。ここにいるには惜しい程の人物である。そのように感じた。

田豊は、そんな呂嬰に気づいたのかいないのか、袁紹に向けていた身体をくるりと彼女の方を見て声をかけた。

「女よ。必要な物はあるか？」

「は。部屋を一つと…ここにいても浮かない程度の召す物を一着お貸し頂きたく思います。」

「それだけでいいのか？」

「はい。十分でございます。」

「では用意しよう。」

田豊は快く承諾してくれた。袁紹は呂嬰を気に入ってくれたようで、それについて何も言わず、彼も快く受けてくれた。

「私には名族たる由縁がある！女よ！これをしっかりと記すがいい！」

袁紹はそう言って後のことは田豊に任せ、座から下りて自室に戻って行った。

他の者もぞろぞろと出て行った。その間、呂嬰は片膝をついた姿勢を崩すことなく、じっと待った。この場は腰を低くし、礼を尽くせば下手に扱われることはないと呂嬰は経験から知っていたからだ。暫くその状態でいると、近くに田豊が来て声をかけた。

「姿勢を崩されよ。
さて…女。名をなんと申す？」

田豊がそう言ってくれることを待っていたかのように、呂嬰は迷わずすっと立ち上がり、田豊へ包拳した。

「はい。私の名前は呂嬰と申します。先程はありがとうございました。」

「そうか。
呂嬰。貴殿の振る舞いは立派であった。そんな貴殿を見て、我が主君も気に入ったようだ。だから私は貴殿を押したが、それは貴殿の

力と言えよう。」

「勿体ないお言葉です。」

「はは。

さて、貴殿を部屋へ案内させよう。では。」

そう言って田豊は出て行き、一人の兵が呂嬰を空き室に案内してくれた。

・・・・・・・・・・・・

縁側に続く、長い廊下の中腹にあるその部屋は、あまり使われていない古い書庫であった。埃が多く、椅子と机はあるが、どこで寝ればいいのか分からない。しかし、そんな部屋に一足入ると呂嬰は眼を輝かせた。そう。あの死んだ魚の眼が輝いたのだ。

呂嬰は兵にしっかりと礼を言い、下がってもらった。そして中へと入り、左手に持っていた長物を机の隣に立て掛け、椅子の埃を掃ってから腰掛けた。

「ふぅ～…。

敬語は疲れる…。」

盛大なため息をついてそう言った。
呂嬰は堅苦しいのは好きでなく、敬語を使えば肩がこるような体質だった。だから先程の態勢やら言葉遣いやらは、ストレスとして彼女に疲労感を与えていた。今までも何度か敬語を使う機会はあった。関羽の時などもそうだった。だが、その時はかなり軽めな敬語だったことを思い出していただけるだろうか？
呂嬰は、尊敬語・謙譲語を駆使する会話は、一国の主であったり、尊敬に値する人物であったりする者以外には使わないという兵(ツワモノ)であった。もちろん、例外はある。彼女もただの不躾な旅人ではなく、時と場合を考えて臨機応変に対応する。

それにしても、今回は久々の上位名族の者との会話。呂嬰は瞼がいつもより重く、偏頭痛気味である。…いつもより疲れてしまっているようだ。

しかし、今いるこの空間は癒される。

「…実に素晴らしい部屋に通されたものだ…。」

うっとりと後にある本棚を見回した。

あ。この部屋の構造を説明しよう。入口は木で創られたスライド式の戸。天井(テンジョウ)に近い壁には明かりが入るように障子の窓がある。入って左側に木製の机と椅子があり、机の上には明かりにするための蝋(ロウ)がある。それ以外の器具は縦にずらりと並んでいる本棚だけ。
間違いなく、寝る時は机に突っ伏すことになるだろう。
しかし、そんな状況になるとわかっていても、呂嬰は機嫌がいい。

その理由はこの圧巻の量の書簡である。

「ここの庭といい…、俺の好きなものばかりだ…。」

……また言い忘れていたが、呂嬰の一人称は『自分』ではなく『俺』である。素であるときや一人であるときは『俺』と称した。別に深い意味はないのだが、なぜそう称すのかは、また別の機会で話したいと思う。

さて、随分と袁紹邸を気に入ったらしい呂嬰。訪れた時間は昼過ぎだった。疲れはあったものの、暫し部屋で書簡を読みあさり、久しぶりの読書を楽しんだ。呂嬰が興味を持つものの一つが読書なのである。職業柄ということもあるだろうが、彼女は実に本好きだった。

・・・・・・・・・・・

…気づけばもう日は傾きかけている。どおりで文字が見づらいはずだと、呂嬰は読みかけの書簡に印を挟んでから閉じた。そして大きく伸びをし、椅子から腰をあげた。

戸を開けて廊下に出ると、目の前は外…。先程の梅の木がすぐそこに立っている。この部屋に来るときは柱で気づかなかった…。

遠くには夕日、側には梅の木、美しい庭園…。

「…これはまた特等席だな…。」

「貴女もそう思いますか？」

呂嬰が独り言を呟いたとき、左手の奥からそれに同意する声が聞こえた。
軽く驚きを見せた表情で、呂嬰はその方向を見た。

「梅の花を見上げ、夕日に照らされる美女…素敵ですねぇ。」

大袈裟で演技のような身振りをしながら彼はそう言った。
そこには、袁紹に謁見しに行く際に見かけた、綺麗だが異様な鎧を身につけた男だった。遠目だったために分からなかった実体がそこにある…。
身長はスラリと高く、顔は整っていて化粧が施されている。

「…；」

呂嬰は背筋が寒くなる気がした。訳の分からないテンションでガンガンくる…。彼女の苦手なタイプのようだ。

「…それは自分の事を言っているのか…？」

呂嬰は半目の目を更に細めてそう聞いた。
嫌悪感をあらわにしている。

「他に誰がいると？」

さも、当然でしょう？と言うような表情だ。

「……；」

これにはどういう言葉を提供してやったらいいのか分からない。

「私の名は張シュン乂。袁紹軍の将をさせていただいております。」

「…そうか…。」

呂嬰は綺麗に流そうとした。

「美しい方。貴女の名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

しかし、流しきれなかった。

「……。
…自分は呂嬰。今日から少しの間世話になる旅の者だ。
…そして…。別に美しくない。気色悪いから『美しい』っていうのはやめてくれよ…。」

「なにを！ご謙遜ですか？
この私が美しいと言っているのですよ？」

「……
……すまない。自分はツッコミというのはよくわからなくてな…。
」

うん。確かに、呂嬰はどちらかといえばボケ担当である。今までツッコミは周囲に任せ、彼女自身は自由に振る舞ってきた。だから、張将軍との会話がこの後、しっかり成り立っていくのか怪しい…。
何しろ、両人とも自由に振る舞う人間なのだから。
呂嬰は今までにないキャラの強さにとりあえず…、いつ逃げようかと考えていた。

「美について私は冗談を言いませんよっ。」

近くまで来て、彼は相変わらず大きな身振りでそう言った。呂嬰との距離は五尺（一尺三十？？）。どう考えても近すぎる…。

「…そうか；
…では…、張将軍…。」

それに圧倒され、呂嬰は少し後ずさりし、相手に気づかれない程にのけ反りながら、男に声をかける。

「なんでしょう？」

「…自分は史書を作成することを仕事にしているのだが、まだネタがない。
…袁紹殿の軍について少し教えてもらえないだろうか。」

もちろん苦手な相手から逃げたい気持ちはあるのだが、今のうちから情報を集めておくにこしたことはない。時間は余りないのだ。その上、目の前にいるのは将軍。この機会は逃したくはない。逃げる事を考えていた呂嬰は、この逆境を好機に代えることにしたのだった。

「ほぅ！呂嬰殿はそのようなお仕事をなさっているのですね！
いいでしょう。最初に何から話せばよろしいでしょうか？」

張将軍は快く承諾してくれた。多分、中身はイイヤツなのだろうなと思いながら、呂嬰は目を左上に向け、さて何から聞こうかと考える。

「…では、兵の数と…袁紹殿の活躍について。」

別に袁紹の活躍などどうでもよいのだが、機嫌とりは大切である。なぜなら、袁紹が曹操と戦を起こすまで…いや、終わるまではここにいたいからだ。

この戦が歴史に残る事は間違いないと呂嬰は踏んでいる…。端から見る人に聞けば、迷う事なく袁紹が勝つと言うだろう。だが、呂嬰はそう簡単に行く戦にはならないと考えていた。何せ、相手はあの曹操である…。

ここに来たのはそれを記すためだ。袁紹などどうでもいい。人物の歴史など、他の史書作成者がやればいい。呂嬰は軍事・政策以外に余り興味がないのだった。

確かに呂嬰は先程、袁紹の前で大口を叩いたが、端(ハナ)から適当に書くつもりであった。彼等は、彼等にとって都合のよい事を書いた物しか受け入れないだろうことは分かっていた。

だから、呂嬰は二つの書簡を作る事にしていた。袁紹側用（とにかく彼等の良いところだけを書き記したもの）と史実用である。

まぁ、呂嬰にとって望むところではないが、袁紹の情報は必要。また、ここで張将軍と親しくなる…事も必要だと考えたのだった…。忘れてならないのは、彼女のモットーが一期一会という事だ。

「そうですねぇ…。兵力についてはお答えできますが…。」

張将軍の声のトーンがやや下がった。これは何やら…アレな感じが

する。

「袁紹殿について…ですか。…まぁ知ってる範囲でお答えはしましょう。」

張将軍は腕を組み、右手で顎を触りながらそう言った。彼の表情は…いい意味でも悪い意味でも、事実を教えてもらえそうなものだった。これは面白いことが聞けるだろうと、呂嬰は内心ニヤリと笑った。

…ここで呂嬰の今までのフォローをしよう。彼女は顔に出にくいだけで、感情が欠如している訳ではないのだ。ただ…、…表に出るのも感情となるのも…少し鈍重なだけである…。

「…では、せっかくなので部屋に入られてはどうだ?…立ち話では申し訳ない。」

呂嬰が借り部屋を左手で指して言うと、張将軍は驚いた顔で呂嬰を凝視した。

「…貴女は簡単に男を部屋に入れるのですか?」

この時、彼女はこの男はなかなか面倒な男であると感じたらしい。呂嬰はその質問を受けた時、一瞬驚いた目をしたが、直ぐにじっとりとしたいつもの目に戻った。そして、サッと張将軍から目を離し、

二歩で着く己の借り部屋の前に立った。張将軍はそれを不思議そうに見ている。
そして、呂嬰はガラッと部屋の戸を開けた。

《参》

「…書庫に入るのに、男も女もないでしょう…。」

張将軍は、目を大きくしてまじまじとその部屋の中を見てから、含み笑いを始めた。
無表情な顔で、呂嬰はそれを見据える。

「全く貴女のおっしゃる通りですねぇ。つまらない事を口走ってしまい申し訳ありません。」

「…いや。別に…。」

張将軍の言葉に対して、呂嬰は無表情のまま言葉を返した。そして、張将軍が自分を男だとしっかり認識している人間である事を見て、実に独特さを持っている人間だと再確認した。やはり外見からいくと、若干女性的な感じがするため、呂嬰は張将軍が乙女心を持っているのではないかと疑っていたのだ。

「…どうぞ…。」

それから、呂嬰は将軍へ部屋に入るように促した。

「……
…客人へ貸す部屋にしては…、些か美しさに欠けますねぇ。」

張将軍は中へ入ると、訝し気な顔で部屋を見回した。
外からでは分からなかった埃が多いその部屋に、張将軍は驚きをみせている。いや、どちらかと言うと呆れているのかもしれない。

「…自分にはこの位が調度いい。素晴らしい書庫のようだし…。」

「そうですか？」

張将軍はもう一度全体を見回してから、納得できなさそうにそう言った。

「客人には礼を尽くすべきだとは思いませんか？
掃除もされていない部屋を提供するなど…袁家の名に傷がつくようなものですよ。」

眉を寄せ、腕を組みながら言う張将軍の意見は、実にまともなものである。若干引きたくなるような先程までとは違うイメージを呂嬰に与えた。

「それに…」

「…？…」

「美しい者はそれ相応の待遇を受けて当然でしょう！」

「……。」

なるほど。後者の理由の方が本命らしい…。

呂嬰はその意見に同意せず、美しい者という部分を否定することもせず、目を合わせることすらせず、無言で椅子の用意をし始めた。

書庫の中には幾つか椅子が点々と置いてある。棚の上にある書簡を取るためだろう。彼女は部屋のところどころに置いてある椅子を二つ選び、会話するのに適当な位置に配置した。机と一緒にある椅子もあるが、それは他のものと質が違うため、使用することは憚(ハバカ)られた。お互いを対等の立場と認識した状況を作る事が、得る情報を良くする基本である。呂嬰が作業をしている間も張将軍は何かをずっと語っていたが、呂嬰の耳には届いていない…。張将軍は張将軍で、呂嬰がその作業をしていることに気付いていないようだ…。

「…張将軍…、準備ができた。」

二つの椅子を机の横に配置し終え、やがて来るであろう夜の闇に備えて蝋燭に火を燈すと、呂嬰は張将軍の方へと振り向き、声をかけた。

「そうですか。では、お力になりましょう！」

何と言うか…。

何度も言うことになるが、実にこの二人は切り替えが速い。もしかすると、乱世を生きるにはこれくらいが調度いいのかもしれない。

呂嬰は張将軍に椅子を進め、自身はメモする物を何も持たずに彼の視界に入っているだろう壁際（カベギワ）に背を預け、腕を組む。そして張将軍が座るのを見届けてから、張将軍の向かえに配置していた己の座る椅子を、彼を右に置くような配置に少しずらしてから座った。

向かい合う形にして話すのは、相手が誰であっても少し辛い。論議するには適当なその配置は、話を聴く・話すという事に向いていない。特に、張将軍にとって呂嬰は会って間もない相手。更に机を挟んでいない状況なのだ。…そして呂嬰からしたら張将軍は苦手な相手……。

だから呂嬰は、少し椅子をずらすことによって、より話しやすい環境を作ったのだ。伊達に話を『聴く』職をやってないというところか。人間の心理を上手く理解している。

「…では、まずは話しやすい軍の事から話していただこう。」

そう言って呂嬰は張将軍に話をするよう促した。

・・・・・・・・・・・・

「失礼します。」

「？

……どうぞ。」

暫く話をしていたところ、戸口で女の声が聞こえた。呂嬰はとりあえずそちらに目を向け、一言返事をする。

中へ入って来た女は袁紹邸に仕える侍女であった。物腰も柔らかく戸を開けて入って来た彼女の手には、深い青緑の着物が持たれていた。侍女は呂嬰にはもちろん、呂嬰の傍に座っている張将軍にも一礼をした。

「呂嬰様。着物をお持ち致しました。私が色を選ばせていただきましたが、何故お目にかかっておりませんでしたので、話を伺った際にお似合いになる色を想像させていただきました。お気に召さなければ代えて参りますが…。」

若い侍女は、経験の無さからか、少し自信なさ気に…しかし丁寧でしっかりと呂嬰にそう告げた。

「…いや、十分だ。

…礼を言う。」

呂嬰はいつもと変わらぬ表情でそう言った。真顔であることは相手に不安を与えるものだが、その侍女は素直にホッと胸を撫で下ろしている。彼女の仕える主人達は、随分と己の気持ちに素直な言葉しか言わないようだ。

「どうやら長居をしてしまったようですねぇ。
そろそろお暇(イトマ)させていただきます。」

呂嬰に気を使って…と言うか、話の区切りもいいと言うことだろう。侍女が開けた戸の外に見える月の位置を見て、張将軍はそう言い、席を立った。

「…そうか。非常に興味深い話を聞けた。礼を言う。」

まだ袁紹について全てを聞いてはいなかったが、これ以上は新しい話も聞けないと見た呂嬰は包拳し、礼を言った。
一人から全てを聞く必要はないのだ。真実は全ての糸が交わるところにある。たくさんの人から話を聞き、吟味し、そして記していく。だから呂嬰は引き止めなかった。
…まぁ、袁紹側用の記録をするには張将軍から得た情報で十分であるというのも理由の一つだが…。

張将軍はにこりと微笑むと、侍女の傍を通り過ぎ、部屋から出て行こうとした。

「…また、どこかでお会いしよう。」

そんな張将軍の背中に、呂嬰はそう言って見送ろうとした。すると、ぴたりと張将軍は足を止めた。呂嬰の頭に『？』が出る。

「また、どこかで…？」

それから呂嬰が言った言葉にひっかかったのか、張将軍は振り返り首を傾げた。

「それは暫く会わない人に言うべき台詞ではないですか？」

「……。」

余計な事を言ってしまったと思わざるおえない呂嬰。無表情で無言の裏には、いろいろな考えが浮かんでいた。

「私達は美しい者同士！既に友でしょう？」

「……。」

張将軍は座っている方が大人しいようだ。立つと身振りが余計大き

くて煩い。そして、『美しい者同士＝友』とは…なかなか面白い定義だと、呂嬰は思った。また、『既に友』という単語を前にも似たようなシチュエーションで言われたような気がして、それを言った者を記憶から引き出そうとした…。

「また近いうちにお会いしましょう？」

「……承知……。」

引き出そうとし→二人の武将を思い出し→呂嬰は目の前にいる派手な格好の武将へと思考を切り替えた。そのため返事が少々遅れたのだ。別に嫌だとか思った訳ではない。屋敷に滞在していれば、会わないでいる訳にはいかない事くらい彼女にも分かる。

…確かに出来たらあまり会いたくはないが、協力してもらっておいて無下にはできない。更に、今後また協力してもらうことになるかもしれない。この事から、呂嬰はとりあえず了解した。

「あぁ。そういえば。」

もう帰るかと思いきや、張将軍は何かを思い出し、再び足を止めた。

「？」

「麗人はこの屋敷にもう一人いますね。」

「…。」

まだ言うかという感じである。

「袁熙殿の奥方…甄姫様。」

「…傾国の美女か？」

「ご存知でしたか。」

「…名前くらいは。」

「そうでしたか。
あの方は戦場にも出陣なさるのです。きっと、貴女とも話が合うでしょう。」

「……なぜ？」

「貴女も戦場にでるのでしょう？そこに武器が見えましたから。」

「……。」

呂嬰はこの時、この将軍を甘く見ていたかもしれないと思った。洞察力はある程度優れているようだ。
だが、呂嬰は別に戦場で戦いたいと思ったことはない。それ以前に戦える程の技術を持っていない。だから、呂嬰は否定しようと口を開いた。

「…いや…それは…」
「大丈夫！分かっていますよ。また謙遜なさるのでしょう？そういう方に限って腕は確かなのです！」

張将軍は完全に自分の世界に入ってしまったようだ。呂嬰の答えを遮って話し続ける。張将軍は呂嬰より話すテンポが速いため、呂嬰は釈明も出来ず固まってしまう状態である。

「…違う…だから…」
「呂嬰殿は美しい上に慎ましやかで素晴らしい女性ですねぇ。」

この瞬間、呂嬰はもう誤解を解くのはやめることにした。最早手の施しようがないというか…弁解の余地がないと見たのだ。

「貴女も知っての通り、直に曹操との戦があるでしょう。その時にでも、会えると思いますよ。」

いろいろ良いように取った後、張将軍はそう言って漸く華麗に…舞うように部屋を後にした。

…呂嬰はしばらく呆気に取られていた。嵐が去ったような感じである。
呂嬰が張将軍の出て行った戸口を『心ここに非ず』な様子で見ていたところ、戸口の左にずっと立っていた侍女が声をかけてきた。

「あの…よろしいですか…？」

恐る恐る呂嬰に尋ねた。
彼女はずっと話が終わるのを待っていたのだ。着物を持ったまま…。

「…あぁ。終わった。
待たせて悪かった。」

侍女に目を向けることなくそう言って、呂嬰はゆっくり歩き張将軍が出て行って戸を閉めた。今まであった出来事が幻かなにかで、現実に戻るための儀式のようだ。

「いいえ…！」

そんな事はないと、侍女は空いている手で意思表示をした。一部始終を見ていた彼女は、呂嬰の今の心情を察し、むしろ自分よりお疲れだろうと感じていた。

「…さて、着物を頂こう。」

戸を閉め、呂嬰は侍女の側に寄り手を差し出した。近くに寄ったことで、侍女は呂嬰をやや見上げる形となった。なにせ、呂嬰は平均

女性より１０？程でかいのだ。この侍女は女性の平均より小柄なようで、尚更体格差が感じられる。

「あ…はい。
…しかし…―」

侍女は、呂嬰のサイズに合わないかもしれないと心配になった。彼女の下へ訪ねてきた兵は、呂嬰の事を『美しいが色が薄く、儚気な婦人』だと言っていた。だから、侍女は小柄で痩せ型な女性かと思っていたのだ。しかし、座っている時はいまいち分からなかったが、実際立っているのを側で見ると、全くその想像は当たっていないと言える。確かに美しく儚気だ。だが、それは『容姿』の『容』の部分であって『姿』ではなかった。呂嬰の体躯（タイク）は女性より男性に近く、華奢（キャシャ）なようでもない。話だけを聞いて、呂嬰に合う着物の色を想像し、選んだところまでに関してはなかなか上出来だと侍女は自分で思っていた。が、サイズはそうではなかったようだ。

「…大きさか？」

呂嬰は侍女の様子を見て、そう尋ねた。今までも似たような事があったのだろう。装丁ね範囲内のようだ。

「あ…はい。」

侍女は目を下に向け、申し訳なさそうにそう言った。

「直ぐに別なものを用意致しますので、少々お待ちいただけますか？」

そして、ぱっと気持ちを切り替え、そのように対応した。仕事根性がしっかりしている。

「…あぁ。わかった。」

呂嬰は彼女の提案を了承し、暫し待つことになった。

《参》（後書き）

本日も読んでいただき、ありがとうございました！

だんだん区切りが微妙になってきた上に、だんだんネタにつまってきました（笑）

どうやって官都の戦いへ持って行こうか…；いろいろ悩みながら頑張っています！

相変わらず、次回がどうなるのか私自身分からない状態ではありますが、次回も読んでやって下さい！

《四》（前書き）

更新するまでかなり長くかかってしまいました～…

まだ『麗人』の続きでございます。

《四》

侍女が着物を持ってくるのを待っている間、呂嬰は机に向かっていた。張将軍から得た情報を記しているのだ。

いつも背中に背負っている皮の袋を机の上に置いて、その中から墨と筆を出している。ただし、常に纏っている麻布はそのままだ。彼女は今までも、あまり麻布を脱ごうとはしなかった…。

袋の中には机の上に置いた二つの他に、竹と紐…、そして自分の書簡と師匠の書簡…あとはメリケンが入っていた。メリケンに関しては、普段は右手に付けている。左手には長物。右手にはメリケンという具合に…。今回は袁紹邸にお邪魔するとあって外していたのだった。

部屋の明かりは蝋燭だけ。日の落ちた部屋で、更に薄暗い手元での執筆活動は久しぶりである。屋敷に世話になる前は普通、昼の道端での執筆になる。なぜなら、夜は明かりなどない野宿になるからだ。火を興すのもいいのだが、それは夏などの乾いた季節にしか向かない。今の春に入ったばかりという季節では、湿気や雪で火はつきにくい。まぁ、南の地方へ行けばまた違うのだが…。

その上、呂嬰は現在、火をつける術を持っておらず、この冬場をどうやって生きてきたの状態だ…。河北出身の彼女にとって、この季節は『火はあって便利な物だが、なくて困る物でない』という感覚なのだろうか…。…というか…恐らく、必要あらば、火のある家に世話になればよいだけのこと…という事なのだろう。

とにかく、呂嬰は夜の部屋での執筆は久々であった。

蝋燭の焔は非常に静かに揺らめいている。手元がようやく見える程度の明かりだが、それもまた一興だ。まだ寒い春という季節。その闇に揺らめく焔は幾分、呂嬰を温めた。

「…さて…。」

…まず作成すべき書簡は史実用である。記憶が新しいうちに正しい歴史を記さなければならない。袁紹側用など適当に書けばいいのだから。

・・・・・・・・・・・・

「失礼します。」

どの位時間が経っただろうか。呂嬰が完全に集中し、書簡が二つ程完成しているところで、部屋の外から侍女の声が聞こえた。

「…入れ。」

「着物をお持ちしました。」

呂嬰は机に向かい、筆を走らせたまま了承の意を述べた。

侍女が戸を開けたことで、冷たい風が部屋の中へと入ってきたのが感じられる。そして、机の上の蝋燭の焔が大きく揺れた。それによって視界が一時だけ開き、侍女の顔も着物の色もうっすらと認識できる。中に入ってきた侍女の手に持たれている着物は、鶯色(ウグイス)の物だった。

「…いい色だな。」

呂嬰はちらりと侍女の手元を見てそう言った。呂嬰のその言葉の真意は、はっきりと分からない。嫌味か本意か…はたまた挨拶程度だったのか。

「ありがとうございますっ。」

だが、どのような意味が含まれていたにしろ、この侍女には嬉しい一言。顔にもそう出ている。普段、あまり喜びの言葉を頂けないという事を除いても、自分が任された客から感謝されることは侍女の誉(ホマレ)なのだ。

「…では、早速着替えたい。自分の着物を洗いたいのでな。」

汚れが酷い自分の着物や麻布を見てから、呂嬰は椅子から腰を上げ、侍女の方へ向いた。

「あのう、でしたら着替える前にお風呂へ入って来てはどうでしょう？」

呂嬰の様子を見て、侍女は目を丸くしてそう答えた。侍女からすれば何故風呂に入らないのかといった感じだろうが、呂嬰にとってそれはまさかの提案だった。
願ってもないことだ。風呂など、旅をしていては滅多に入ることが出来ない。

「…ありがたい。」

呂嬰は心からそう言った。侍女にもそれは通じただろう。

「そうと決まれば、早速向かいましょう。」

満面の笑みで侍女はそう提案した。呂嬰は侍女が何故そのような笑みを浮かべているのか理解出来ていなかったが、それよりも服を洗えて自分も洗える事が楽しみだったため、気にすることをやめた。
何気に汚いことを気にしていたようだ。見た目もボロボロで土や埃、

もちろん汗も染み付いている。酷く臭う訳ではないが、いい匂いがする訳ではない。いつから洗ってないのかは触れないでほしいところだ。

「着物は私の方で洗いますよ。」

「…いや、自分は別に忙しくもないし、貴女のように決められた仕事もない。…これくらいは自分でやらせてくれ。暇つぶしになる。」

呂嬰は書簡を乾かすために、手で風を送りながらそう言った。乾かないまま畳んでしまったり、何かにぶつかったりしては大変な事になるのだ。

…いつもそうだが、呂嬰は欲しい情報を聞く時は全力で『聴く』が、そうでもない時は目を合わせない。しかも何らかの作業をしながら話す。結構分かりやすい女である。

「しかし、これも私の仕事ですから…」

侍女は困ったように笑みを浮かべた。客にそのようなことはさせられないのだろう。袁家の侍女としては、仕えている主の名を高めるため、客に対して礼を尽くす事が義務として課せられる。侍女はそれをよく理解していた。そして、呂嬰もこの侍女の立場を重々承知していた。

「…貴女の仕事は客に尽くす事だ。それは、客の願いを聞くと言う事だろう。
…これは自分の願いだ。だから、主からの叱責もないはずだ。」

呂嬰が机の上を片付けながらそう言うと、侍女は顎に手を当てて少し考えてから納得した笑みを浮かべた。

「素晴らしい屁理屈ですね。では、お言葉に甘えさせていただきます。」

この時、呂嬰はちらりと侍女の様子を見て、以外とこの侍女は聡明かもしれないと思った。これはただの感だ。だが、前に言ったかと思うが呂嬰の感は鋭い。

「…そういえば、名を聞いていなかった。」

あらかた支度はできたようで、引いたままの椅子を机に戻し、侍女に尋ねた。

「あ。失礼致しました。
私の名は李楊玉（リョウギョク）と申します。呂嬰様が袁家に御滞在の間、身の回りのお世話をさせていただきます。何なりとお申しつけ下さい。」

「…そうか。よろしく頼む。

…では、楊玉。早速案内してくれるか？」

呂嬰はそう言って長物を手に取った。絶対に長物と皮の袋を肌から離すことをしない。侍女はそれを不思議に思ったが、旅が長い人だからそこは仕方がないのかもしれないと、たいして気にしないようにした。

・・・・・・・・・・・・

「…何処まで行くんだ？」

呂嬰は侍女の後ろをついて行く。最初は黙ってついて行っていたのだが、かなり屋敷の奥までやって来た。

「もう少しで着きます。呂嬰様がおられる部屋からは反対側の屋敷に在るものですから…。」

時折すれ違う兵に会釈をしながら、長い廊下を歩いていた。呂嬰の質問に答える際、少しだけ呂嬰の方へと振り返った侍女‥楊玉の顔は、申し訳なさそうに歪められていた。別に不平を行った訳ではなく、疑問に思って問うただけであったのだが…と、申し訳なさそうにしている侍女に申し訳なく思う呂嬰であった。

袁紹低の広さはかなりのものだ。中庭もあり、屋敷は二つの建物が橋で繋がっている。呂嬰がいる建物ではなく、もう一つの建物に風呂があると言うのならそれは距離があっても仕方ない。…が、そうなると一つの疑問が浮かぶ。

「…この屋敷には、風呂は一つしかないのか？」

呂嬰はその疑問を侍女にぶつけてみた。

「いえ。客人専用、兵専用、下々（シモジモ）専用が幾つかございます。上層部の方々は各自、御自宅にお風呂があります…。客人専用のお風呂はこちらの屋敷にしか無いのです。普通、客人はこちらの屋敷にお泊めになるのですが…。」

侍女は言い辛そうに俯き、着物の袖を口に当てながらそう説明した。その様子を後ろから見てから、呂嬰は辺りを見回した。

「…あぁ…。ここは造りも違うようだからな。庶民の自分を通すのは躊躇（チュウチョ）されたんだろう。
…客人専用の風呂に自分が入るのは、実は了承を得てないのではないか…？」

「いえ、田豊様には了承を得ていますので、そこは問題ございません。」

「…では、何が問題あるんだ？」

侍女の言い方は、何か歯に挟まった言い方に聞こえた。彼女は何かを気にしていると見える。

「……あぁ…。こちらの話なのですが…」

そう言って歩いたまま、また言いにくそうにはにかんだ笑みを呂嬰に見せた。

「今まで一度も…まともに炊事場に立たせてもらえなかったのですが、今日の夕食は私が作ることになっておりまして…。」

「……。」

「本当に緊張と不安とで。」

「…貴女は此処に来て長いのでは？」

恐らく、年齢は自分より上であろうと呂嬰は思っていた。何となく幼い雰囲気を漂わせているが、所作や臨機応変な段取りが新人には見えなかったのだ。

侍女は、呂嬰が自分の勤務年数を尋ねてきた事に何一つ疑問を抱くことなく、淡々と答え始めた。

「はい。ですが、私達はそれぞれ決まった仕事を承っておりまして、私は殿方や夫人方の身の回りのお世話が中心なのです。」

「…なるほど。では、何故そんな楊玉が食事の仕度を任せられたんだ？」

呂嬰も淡々と疑問を口にし続ける。

「えぇ。それは…―」

急にまた口を開くのを躊躇（タメラ）いだした。それを見て、呂嬰はふと思いついたように目を上に向けた。

「…あぁ。自分の分はまた別ということか…。」

つまり、呂嬰は客にもならない居候の存在であるから、食の世話はベテランでなくとも問題ないだろう。と思われたということである。

「……申し訳ございません……。精一杯勤めさせていただきますので、ご了承下さい。」

突然くるりと呂嬰の方へ振り返り、深々と頭を下げた。別に彼女のせいではないのに。

「…気にしていない。貴女がそのように言ってくれるだけで、自分は十分だ。」

呂嬰は侍女に合わせて足を止め、そう言った。侍女は少しまだ申し訳なさそうであったが、いくらか胸の取っ掛かりが取れたような笑みを呂嬰に向けた。
そして、また再び歩みを進めた。

《伍》（前書き）

かなりお久しぶりです。
さて、前回までを振り返ってみると、だんだん呂嬰（リョエイ）の人物像もはっきりしてきまして、ようやく出発点まできたかなという感じですね～。また、ちょっとした謎も解決していないままです。
今回の話は得に進展はなく、侍女と絡んでいるだけな感じです。ですが、この話がまた少し…呂嬰の人物像を描いていて、次に繋がるものになっている…ようなそうでないような…。

では、よかったら読んでやって下さいっ！

《伍》

ここまで嫌がらせが続くと、どうも…何かがひっかかる。黒幕の人物像について、呂嬰は思考を巡らせ始めた。

とりあえず、袁紹は呂嬰の待遇を田豊に任せたはずだから、袁紹が呂嬰をおとしめようとしていない事は確かだ。だから彼は置いておく。

また、呂嬰がここに来た事を良く思ってない文官がまだ居ることは分かっている。そう思う事は不思議でも何でもなく、むしろ当たり前だと言ってもいい。ただ、少なくとも田豊は違うと呂嬰は踏んでいる。彼が呂嬰に対して蔑ろ(ナイガシ)にするような待遇をするはずがないと…。

恐らく、田豊はそれなりに階級は上のはずだ。彼が呂嬰のためにそれなりの待遇の手配をしてくれた事は間違いない。

…としたなら、一体誰が呂嬰にこのような雑な待遇をするように指示したのか…。更に上の階級の者か、それとも…―。

呂嬰はここまで考えて、それ以上考えることをやめた。長い間ここに留まる訳ではないのだから、考える必要がないのだ。少なくとも、この疑問点は呂嬰がここに来たせいで起こったことであり、自分にしか害がない。確かに、周りに迷惑をかけている状況になってはいるが、それは呂嬰がいなくなれば無くなる憂いだ。つまり、全ての問題の解決策は呂嬰がいなくなることなのだ。

解決策が分かっていれば、それ以上考える必要などない。…という考えが彼女の考え…。

「呂嬰様。着きました。」

呂嬰がいろいろな事に思考を巡らせていると、侍女がふと立ち止まり、声をかけてきた。
呂嬰は、随分黙ったまま侍女の後ろを歩いていたことに気づいた。

「…。」

侍女への反応はゼロのまま、無言で周りを見渡し確認すると、そこは山と川が近い屋敷の端だった。
そんな呂嬰を見ながら侍女は『にこり』と笑い、引き戸のついた部屋の前に立つ。

「こちらは露天風呂となっております。脱衣をする場が少々狭く、御不便をかけるかも知れませんが、御了承下さい。ここの湯は、肩凝りや筋肉痛に効きます。」

軽く説明をしてから、侍女は戸を開けた。

「……。」

風呂場は石で固められた簡易なものだった。しかし、それは温泉だからだろう。呂嬰は滅多に見れないそれに見入った。

「…さすが名族…。」

心からそう感嘆の意を述べた。袁家というより名族に対して。

「桶と手ぬぐいはここに置いておきますね。他に必要なものはございますか？」

「…いや、ない。ありがとう。」

「では、夕食の用意を致します。ごゆっくりして下さい。」

そう言って、侍女は下がった。

・・・・・・・・・・・

呂嬰は長物を入口辺りに立てかけ、皮の袋をその下に置く。そして服を脱ぎ、手ぬぐいを手に湯舟へ向かった。湯気で視界が良くなかったが、外は何となく見えた。すぐ傍を小さな川が流れていて、その奥は苔（コケ）の生えた岩で固められている。川は自然の物だろうが、岩は人工的に積まれた物のように見える。岩で固められているため、

景色は楽しめないが、それでも庭園のような雰囲気のある風呂場だ。
呂嬰はまず、風呂の淵に腰を下ろし、湯舟に手ぬぐいをつけてゆっくりと身体を拭き始めた。そもそも色は白いが、洗われた肌はより美しい白さを見せている。
一通り拭いた後、手ぬぐいを見るとかなり汚れていた。呂嬰はそれを湯を汲(ク)んだ桶に入れ湯舟のわきに置き、足を湯舟につけていった。
肩まで浸かると、呂嬰の長い髪が湯舟に広がってゆく……──。
湯加減は調度良く、日々の疲れが流れ出ていくようだ。

「…ふぅ…。」

一息つき、目を閉じた。
ようやく一日が終わる。

・・・・・・・・・・・・

「ご存知ですか？近々戦(イクサ)が始まるそうです。」

風呂から上がり、出口で待っていた侍女と真っすぐ部屋に戻ってきた呂嬰達。
今は、侍女が呂嬰の黒く長い髪を解いている最中である。しばらく黙ったままで侍女は呂嬰の髪を解いていたが、ふと怪訝な面持ちで侍女が尋ねてきた。

「…有名な話だ。」

呂嬰は書簡を読みながらそう返した。そもそも、それが始まると聞いてここに来た呂嬰。彼女にとって今更驚く情報ではない。

「ご存知でしたか。」

侍女は苦笑しながら鏡に映る呂嬰を見た。

「…正直…、私は不安で堪らなくなるのです…。」

濡れた髪にくしを通す手を止め、侍女は少し俯いた。

「…袁紹軍が負けるかもしれない事がか？」

「…。」

その無言を呂嬰は肯定ととった。

世の中の人がこの戦の話を聞いたら、どう考えても袁紹軍が勝利すると言うだろう。それは軍事力を見れば一目瞭然だし、名家の袁紹軍が負けるはずがないと考えるのが当然だ。

しかしそんな中、この袁家に仕える侍女は勝敗を案じている。実に

滑稽である。

「…栄える時あれば、いずれ廃れる時も来るものだ。…案ずるのもいいが、その時が来た時の見の振り方を考えなければならない。特に、自分達…女はな…。」

呂嬰は読んでいた書簡から、一旦目を放した。そして、その目を鏡に映る侍女に向けてそう話した。

「そのように…簡単に切り替える事はできません。たくさんの人が死ぬかもしれない…。今まで一緒に働いていた人もばらばらになるかもしれない…。そう考えると…、私は恐ろしくてならないのです。」

「……そうか。」

呂嬰は鏡に映る侍女をじっと見つめている。彼女の内を見抜こうとするような目で…。
侍女は悲しそうに俯いたままで、呂嬰の目に気づいていない。

「……涙を流すのはいつも…男より女だよな…。」

呂嬰は目を書簡に戻し、自分にしか聞こえないような声で、そう呟いた。

「え？今なんて？」

侍女は顔を上げ、鏡に映る呂嬰の顔をみる。書簡に目を落とすその表情は、いつもの様子と変わらない。しかし、彼女を纏う雰囲気が少し変わったように侍女は感じた。

「…何でもない。」

呂嬰は、侍女に何も話す気はないようだった。

呂嬰が旅を初めてから十数年経つ。その間に見てきたものは、今の呂嬰の糧となっている。得たもの、無くしたもの、学んだもの…。その全てがだ。

長いこと旅をしているとたくさんの人々に会う。

呂嬰がまだ幼かった時、自分の師と旅をするようになってから、戦に出て行った旦那を待つ女性達の村へ通り掛かることがよくあった。呂嬰達が訪れた町の女性達は、幼い子供や年老いた親と暮らし、実に貧しい様だった。呂嬰は書簡に、この時の事を綴（ツヅ）っている。

『彼女達は実に気丈に振る舞っていた。だが、一人になれば涙を流し、夫の無事を祈り、生活の苦しさを嘆いていた。』

それに対して、戦場にいる男達を見ていると、前しか見ていない者が多いように呂嬰には見えた。彼らは戦功を立てることを目的とし、戦いの先に希望を持って生きているように見えたのだ。
呂嬰は、別にこの男女の差を悪いとは思っていない。彼女は、女性が涙を流す世の中になっているのだなと解しているだけ…―。ただ、彼女がそれを不公平に感じているのもまた事実である。

「…変な自信家と言うのが男だ。彼らを止めることはできない。」

「…それならば、せめて徳のある方が国を治めてくれれば…それでいいのですが。」

「…だとしたら、それは袁紹ではないな。」

「……それをどこかで感じているからこそ、私は不安になるのかもしれません…。」

「さ、こんな話を誰かに聞かれてはお互いにまずいでしょう。夕飯の仕度も出来ています。」

「…あぁ……―。」

理不尽な程、女は男達の野望や欲望に翻弄される。ここでもそうかと、呂嬰は深く息をつき、

目を閉じた。
まぁ、何処でも同じなのは当たり前かもしれないが、己が身をおく事になった場所で、時代を憂い涙する女を…此処でも見てしまった

かと…この時の彼女の言葉はそういう意味だったのかもしれない。

《伍》（後書き）

お疲れ様でした～！

いかがだったでしょうか？まぁ、それほど面白い話ではなかったですかね…。へへっ。

今回で『麗人』は終了です。次回からはまた違うお話が始まります。ここまで読んで下さった方、ありがとうございます！よかったら感想も頂けると勉強になります！

では、失礼します！

好人《壱》（前書き）

今回はまた少し動きがあります。
袁紹邸に数日程お世話になっている主人公。

だんだん有名武将が増えてくる予感がします！

好人《壱》

あれから暫く袁紹邸にお世話になっている呂嬰。彼女は時たま…一瞬だけ、ここを自分の終(ツイ)の住家にしようかと思う時があった。
呂嬰の史書家という仕事は、自分の主を見つけた瞬間に旅は終わり、死ぬまでその主に仕えるというのが基本だ。そしてその主の治める国や村について記し、いつか現れる後生の歴史家達の為に史書を残すのだ。

呂嬰は史書家である自身の永住の地を、居心地のよいこの袁紹邸にしようかと考えたのである…。

しかし、その考えが頭に浮かんだ瞬間、直ぐに思い直すのだ。あの君主（袁紹）には絶対に付き従いたくなくないと…。

呂嬰は今まで、一度も自分が付き従いたいと思う人間に出会った事はなかった。
だから一度も一国に留まる考えを持った事はなかったし、自分の師の如く流浪してきたのだった。
別に留まる事が呂嬰の念願の望みと言う訳でもないが、それは史書家としての到達地点だ。史書家になった以上、到達しなければならない。でなければ、『史書を後世に残す』という呂嬰の目標が達成されない…。
それは呂嬰にとって…史書家になり、生きてきた意味がないようなものだった。

「……。」

現在、呂嬰は支給された部屋。否、書庫の前の廊下に立っている。太い木製の柱に寄りかかり、散り始めた梅の花をぼーっと見ていた。今日の彼女は、無地で紺色の着物を身につけており、麻布も皮の袋も持っていない珍しい姿である。普段はもちろん、旅の途中でもこのような格好になることはない。なぜなら、呂嬰は極力難を逃れるため、己が女であることを隠す必要があったし、大切な書簡が入っている皮の袋を人目に曝すことを嫌ったからだ。

ならば何故、今は普段肌身離さず持っているそれらを身につけていないのかと言えば、呂嬰がここは完全に安全な場所だと見定めたからだ。

警戒心の塊のような彼女がそこまでこの場所を信頼したのは、きっと呂嬰の世話を承っている侍女が信頼できるからだろう。今呂嬰が身につけている紺色の着物は、呂嬰のその信頼すり侍女が選んできてくれたものだ。呂嬰の白い肌を映えさせており、ナイスチョイスである。

「…季節はまた移る…か…。」

呂嬰はそう呟き、ただ散る梅の花を見る。

いまだに戦(イクサ)の兆しが見えない袁紹側。直ぐにでも起こるだろうと見ていた呂嬰の予測は、久しぶりに外れた形となっていた…。

・・・・・・・・・・・・・・・

呂嬰は今日もまた、庭先を眺めながらぼーっとする一日を過ごしていた。呂嬰の仕事は、何か起こらなければ何もできないのだ。だからといって、このまま待つばかりでは何も得られないと踏んだ呂嬰は、少し足を伸ばしてみようと考えた。

「あら？呂嬰様、どちらへ？」

呂嬰が部屋を出て行こうとしたとき、侍女がちょうど廊下に立っていた。
呂嬰は、侍女の手にお茶をいれる用具が持たれているのを見てから口を開いた。

「…暇なのでな。少し外を見て回ろうと思っている。」

「そうでしたか。では、お茶はまた後に致しましょう。」

「…申し訳ないが、そうしてくれ。じゃ…。」

呂嬰はすっと侍女の傍らを通り過ぎた。

「あ、そうでした！
呂嬰様。今日、大広間で軍事会議があるそうです。そちらに行ってみてはいかがですか？」

侍女はぽんっと手をたたき、くるりと呂嬰のほうへ振り返った。

「ほぅ…そうか。ありがとう。」

その情報に、呂嬰は目を丸くして侍女を振り返り、一息置いてから礼を述べた。感動が薄いように見えるが、この時の呂嬰は大きな喜びと興奮を感じていたらしい。

「いえ。いってらっしゃいませ。」

にこりと微笑み、侍女は呂嬰を見送った。

・・・・・・・・・・・・・・

早速呂嬰が訪れた会議室。

呼ばれて行った訳ではないため、当たり前といったらそうなのだが、大広間に集っていた武将や文官達は呂嬰の姿を見るなり、一様に眉を潜めた…。

「何故貴殿はここに参られたのか？」

「…史書家として…袁紹殿側に軍事的な動きが出れば自分は動きます。」

軍事会議は言うまでもなく、戦の結果を左右する大事なものだ。それに数日しか滞在していない旅の者に立ち会わせるということは、かなりの危険が伴う。
殊に、呂嬰がここにやってきたのは戦が始まるという噂が流れはじめた頃で、袁紹がどうあれ、武官や文官達は彼女を敵方の者ではないかと警戒していた。

「我々は貴殿がこの会議に参加することを遠慮していただきたいという意見だ。理由は察してほしい。」

呂嬰の揺るがない態度に他の将軍達がざわめき出した時、奥から一人の将が声を上げた。

見れば、天下にも知れ渡る武勇を持つ文醜であった。彼の周囲の者達は、その意見に同調するように頭を縦に振っている。

流石の呂嬰も、殆どの武官や文官達を敵に回しても仕方がないことくらい知っている。せっかくの機会だったが、もう少し信用を得てからの方が得策かと考え出した時……―

「それ程彼女を邪険にしなくともよいのではないですか？」

聞き覚えのある聞きたくない声が…部屋に響いた。

「ふふ。やはりまた直ぐにお会いすることになりましたね！呂嬰殿。」

どうして今の今まで気づかなかったのかと思う程、派手な格好とずば抜けた長身の男…。

「……張…将軍…。」
呂嬰はこの男の存在をすっかり忘れていたのだった。
呂嬰も驚いているが、周囲の武官・文官達も驚いている。

「張将軍、何故に呂嬰殿の肩を持つのか！？」

「皆さんは彼女を敵の間者ではないかと怪しんでおられるようですが、全く無用な心配です。
なぜなら…、彼女の目は嘘をついていない美しい目だからです！」

「「………」」

一同ドン引き。

「ついでに言うと、女性の間者というのはもっと愛想よい者が多いですし、相手に不信感を与えるような時期に来て、堂々と正面から軍事会議にくるような事をするものではありません。」

『ついで』と言った方がかなり説得力のある説明だった事に、殆どの者達が心の中でツッコんだのは言うまでもないだろう。

この張コウの発言によって、呂嬰は軍事会議になんとか参加できる事と相成った。

・・・・・・・・・・・・

さて、袁紹も姿を見せ、会議は始まった。会議は長机を囲むようにして行われている。袁紹は少し高い上座に座し、それ以外の者達は立ちながらの会議であった。

呂嬰は張コウから助けてもらった身であったが、彼が呂嬰にとって苦手な人種であることに変わりはなく、出来るだけ避けたいと考え

ていた。
その為、張コウがいる場所と反対側へ陣取った呂嬰。だが、少し話に聴き入ってふと隣を見ると…張コウが……―いた……―。
この時、呂嬰は初めて背筋がゾッとしたと後に語っている―。

好人《壱》（後書き）

また最後まで読んでいただき、ありがとうございました！

いや～、きっちょむ的には張コウ好きですね！

でも、ムービーを見てちょくちょく引いたりします～（笑

今後、呂嬰と張コウの関係がどうなって行くのか楽しみにしていただきたいところです！

では、また次回も読んでやって下さい！

以上きっちょむでした～！

《弐》（前書き）

長くなってしまいました！膨大な感じがします！

今回は大きく展開が変わってきました。いよいよ官都の戦いに向かって一直線ですね。

《弐》

「…自分も同行させていただけませんか？」

軍事会議は、一つの机を囲むように武将達が集まり話し合う。軍事会議の間、呂嬰は話の輪に入ることなく壁に寄り掛かり、ずっと静かにその会議を見ていたが、話が一区切りしたところで割って入った。

「何！？」

袁紹はそう言い、実に驚きに満ちた表情で呂嬰を振り返る。そして袁紹だけでなく、その場にいた全ての武将が呂嬰を振り返った。

驚きを見せている者もいれば、かなり嫌悪感を見せている者もいる。女が戦場に出てくることを気に入らない輩は多いのだ。

呂嬰はそれを感じとっていたが、全く動じていない。ゆっくりと会議をしている中央の机に歩いていく。

「貴様、調子にのるでないぞ！」

「女など足手まといだ！」

辺りから罵声が飛ぶ。
先程助け舟を出した張コウは、腕組みをし、片手を顎に当てながらじっと呂嬰を無言で見ている。
そんな中、呂嬰は無言で袁紹の近くまで行き、包拳した。

「…自分はこの目で見たいのです。袁紹軍が勝利するところを…。…それに…―」

そう言ってからくるりと身を翻し、武将達に向き直った。

「…袁紹様の次男、袁熙様の奥方様は戦場で華麗な舞と優美な笛の音を響かせるとか…。男にも負けぬ戦巧を立てたと聞きます。女が足手まといと決め付けるのは…些かどうかと思いますが。」

この時の呂嬰の言葉は、珍しく毒と刺があった。更に目にはどす黒いものが映っている。
呂嬰の発言の毒と刺に、周囲が気づいているか不明だが、武将達は顔を強張らせている。

「仕方がない！ならば同行させよう！」

袁紹は全くこの雰囲気を察することなく、豪快に笑いながらそう言った。呂嬰が袁紹の息子の嫁を褒めた上、袁紹軍の勝利を見たいと言ったことに気分を良くしたようだ。

袁紹が是と言ったことに異議を申し立てた武将が多くいたが、袁紹は全く聞き入れず周りは了承するしかなかった。

「では呂嬰よ。顔良軍に同行するがよい。」

顔良は驚愕した表情…。
呂嬰はご満足な表情…。

まあ、こんな具合のいきさつで呂嬰は戦場に赴く事になったのだ。

それにしても、袁紹とは実に全く持って扱いやすい男である。こんな上司を持っている下々（シモジモ）達を哀れむ呂嬰であった。もちろん、心からではなく表面だけのものだが…。
とにもかくにも、戦場に連れていってもらえる事は喜ばしい。しかし、呂嬰は最初からそうするつもりだったため、戦場に行くのは当たり前のような感じだ。予定通りと言ったところだろう。

「…感謝致します。」

呂嬰はその場にいた者達全員に包拳し、そしてその場を後にした。

その場にいた武将達は、納得していない面持ちでその後ろ姿を見ている。約一名を除いて…。

・・・・・・・・・・・・

「呂婁殿！」

呂婁が会議室を後にして廊下を歩いていると、後ろからあまり聞きたくない声が聞こえてきた。

「…張将軍…。」

その声がした方へ振り向き、呂婁はぎこちない口調で相手の名前を呟いた。声でわかっていたつもりだが、実際目の当たりにすると言葉にならないものがある。

「呂婁殿。やはり、ただ者ではありませんねぇ。」

「…貴殿もそうだろう。

礼が遅くなってしまってすまない。…先程は助かった礼を言う。」

「いいえ。新しいものが介入する事に抵抗がある考え方は好きではな

いので。
そんな事より、窮地を好機に代えた貴女は素敵でしたよ。」

「……そうか…。」

呂嬰は反応に困ってしまった…。

彼女はふと、今まさに会議室から出て行こうとしている一人の男に目を向けた。

特に高い位を与えられた訳でもなく、輝くばかりの才能に満ち溢れている風でもない。

…しかし、呂嬰はその男が人を引き付けるものを持っている人間であると直ぐに気づいた。

「…あの御仁は？」

呂嬰は隣に立っている張コウに尋ねた。
張コウは呂嬰の見つめる先を見る。

「あぁ。あの方は劉玄徳殿ですねぇ。黄巾討伐の際は義勇軍として参戦して、いろいろあって、今はここにいるらしいですよ。」

「…詳しいな。
そんな御仁が今はここにいるというのは、何か理由があるのか？」

「えぇ。大変だったようですよ。私も人づてに聞いただけなので詳しくは知りませんが何でも、信頼を置く重臣とばらばらになってしまわれているとか。」

「…ほぅ…。
劉玄徳…覚えておくか。」

呂嬰は静に去っていく劉玄徳と、彼に付き従う大男の背中をじっと見た。
これは彼女の勘であるが、この男達が今の乱世で名を挙げて行くと感じた。理由などないが、袁紹などよりも大きくなり、生き残っていくだろうと確信したのだった。

呂嬰は質問を終えると張コウに向き直って包拳し、自室に戻ろうと踵を返した。

「あ。一つだけ、貴女に忠告しておきましょう。」

張コウの言葉に、呂嬰は振り返る。

「…？…」

「貴女は勘が鋭いはずです。……ご自分の勘を大切になさってください。」

「…一体どういう意味だ？」

「直ぐにわかるはずです。では、ごきげんよう。」

華麗に去っていく張コウの後ろ姿を、呂嬰は怪訝そうに見送るのだった。

・・・

最近気づいた事だが、どうもこの侍女は着物選びが趣味になってきたようだった。

「…申し訳ないが、明日の戦に自分も出る事になった。自分がここへ着た時の着物を着て行きたいのだ。」

呂嬰は少し迷ってから、彼女にそう告げた。

侍女は驚き、先程まで笑顔だった表情を悲しみと恐怖の表情へと変えた。

「……何故ですか？何故貴女様が戦場へでなければならないのですっ？」

「…自分から志願した。
戦いに行くのではない。見に行くだけだ。」

「戦場は恐ろしい所ですっ！見に行くなどと軽い気持ちで行かれる場所ではありません！」

侍女は手に持っていた着物をギュッと抱きしめ、極力声を張らないようにしているように見える。
侍女の手も声も震えていた。

「…貴殿は戦を間近で見た経験があるようだな。」

その侍女の様子から、呂嬰はそう感じ取った。
侍女は目を見開き固まった。

「…このご時世だ。そういった者が身近にいても驚きはしない。…自分もそうだからな。」

「え…」

「…だが、自分にはそれがいい契機になっている。避けるべきものではないんだ。」

「呂嬰様…。…どうしても、私は貴女の判断が正しいとは思えません…。
死など簡単に訪れるのです。目の前で…、あっという間に…。
死んでいいのは…戦を起こす輩のみです……。」

そう話す侍女の雰囲気が変わった事に、呂嬰は眉を寄せた。これはどこかで感じたことのあるものだと…。そして、それは比較的に最近感じた気がした…。

「……なるほど…。
あの時の…。」

呂嬰は完全に思い出した。この袁紹邸に来る途中に見た光景を…。
そして、その現場から去ろうとした際にに背中に感じた殺気を…。
そうだ。あの時の山賊を皆殺しにしたのは……

「…あれはお前がやったのか…。」

侍女は顔を手で覆っている。

「やはり、気づかれておられたのですね…。あの時は貴女がまさか袁紹邸に来られるとは思ってもおりませんでした。」

「…何故殺した…？いや、どうやって殺したんだ？」

「…ふふ。貴女も前におっしゃっておられたでしょう？いつも泣くのは女だと…。私も両親を黄巾に殺されてからずっと一人で生きてきて、いつもそう思っておりました。
でも、女が男に勝てないのはそれ相応の努力をしてこなかったからだと気づいたのです。ある時襲ってきた男を持っていた小刀で殺した時に…。
あの日から、私は小刀で人を切る訓練をいたしました。隙をついてであれば、あの程度の輩などたやすく殺せます。」

ゆっくりと顔から手を放しながら語る侍女の目は、狂気を映し出し、口元は笑っていた。

呂嬰は「そうか」とだけ言うと、自分の机に向かい、机の上に置かれた物を片付け始める。

「他に聞かなくともよろしいのですか…？」

侍女は怪しげな笑みを浮かべた表情で呂嬰を見つめた。
呂嬰は侍女を見ることもなく口を開いく。

「…自分はそれ程この件に関心がないし、貴殿を責める立場にもない。そしてこの事実を知ったところでどうしようとも思わない。…何せ、自分は居候の身だからな。
…だが…、人殺しを肯として話す貴殿の顔は…悲しそうだ。」

「！！」

侍女は息を呑み、そして先程まで笑っていた口元を一文字に結んだ。
狂気を孕んでいた目からは大粒の涙がこぼれる。

「…人殺しは人殺し。
貴殿は途中で気づいていただろう？どんな理由があれ、自分もまた…、両親を殺した輩と同じ事をしていると…。
そして、どんなに肯定しても罪の意識が己のなかに積み重なっていくのを…。」

呂嬰はゆっくり泣き崩れる侍女に向き直り、語りかけた。

時代は乱世。
男達は御のが野望を果たさんと立ち上がる。
その一方で生まれる悲しみと絶望、憎しみの連鎖が人々の心を少しずつ蝕んで行っている事を呂嬰は感じていた。

・・・

らなかったかもしれない。それなのに呂嬰に語ったと言うことは、本人もやはりかなり苦しんだからなのだろう。
呂嬰を信頼し、受け止めてくれると心のどこかで感じたからこそ語ってくれたようにも思う。
呂嬰はそれも全て理解していたのかもしれない。

支度を終えるといつもの長物を片手に呂嬰は部屋を出た。
何となく戻って来ないような気がして、世話になった書庫を少し見渡してから、そっと戸を閉めた。

・・・・・・・・・・・・・・・

外に出ると、各軍が配置に付き、袁紹の言葉を聞こうと整列していた。
呂嬰はきょろきょろと顔良軍を探している。すると、やはり目立つあの男が目に入り、その男へ近づき声をかけることにした。

「…張将軍。」

「おや。貴女から声をかけてくるとは！
どうしました？そろそろ袁紹殿の長い演説が始まりますよ。」

軽く袁紹に対する毒を吐きながら張コウは呂嬰に問い掛けた。

「…貴殿はいつから気づいていたのだ？あの侍女がただ者でないと。」

呂嬰の言葉に、何の事かと少し考えてから、張コウはぽんと手を叩いた。

「あぁ。
…目つき…ですかね～…。それと、最近巷で噂される乱暴者を殺すところを目撃したことがありましてね。」

「…見なかったことにしたのか？」

張コウの爆弾発言に動じず、呂嬰は問う。

「結果的にはそうなりますねぇ。しかし、私は彼女を責める立場になかったのです。
彼女は争いを起こす者を殺し、私は争いの中で人を殺すのですから。」

呂嬰は自分と同じ考えをしている張コウに好感を持った。

「…尤もな意見だ。…だが、些か解せない。

自分に忠告してくれたのは何故だ？」

「貴女が、彼女を助けてあげられる人間だと思ったからです。
…その先は何も考えていません。軽率だったでしょうか？」

張コウは心配そうに眉を寄せた。幾分かは気にかけていたようだ。

「…いや。
貴殿の考えはわかった。それに疑問も解決した。
…そろそろ始まりそうだな…失礼する。」

「では、また戦場でお会いしましょう！」

「…あぁ。運が良ければな。」

張コウが華麗なお辞儀をしたのを横目で見て、呂嬰は踵を返した。

・・・・・・・・・・・・・・・

袁紹が話始めた頃、呂嬰は袋から書簡と筆を取り出し、何かを記し始めた。

『２００年官渡の戦い』

《弐》（後書き）

張コウ…。食えない男でしたね～！なんか途中からかっこよく感じたのは私だけでしょうか（笑）？

侍女…まさかの展開でついて来れなかったかたはいませんか！？

次回も是非呼んでいただきたいです！

以上きっちょむでした！

《参》（前書き）

書いていて、自分の知識が限界に近いことに気づいたきっちょむです。なので、もう歴史をはしょり始めています！完全にきっちょむ世界になってくるであろう今後の展開！お楽しみ下さい…。

《参》

戦に立つのは、呂嬰にとって初めてではなかった。
それは己の師匠も戦場に立ち、傍らで記録しているのを見てきたからだ。

しかしそれ以前に彼女は戦を経験していた。
彼女の両親は戦に巻き込まれて死んだ。
呂嬰もまた、戦の被害者だったのである。

「…久しぶりの戦場だな。」

顔良軍の最後方から歩いて付いていく呂嬰。張コウは戦場で会おうと言っていたが、彼らは全く別方向に布陣を置いている。何か起こらない限り会う可能性は低い。
恐らく、お互いに生きようと言う意味が込められた挨拶だったのだろう。

顔良軍には力のある軍師がついて来ていたが、顔良を一騎で戦場に出した辺り、軍師としての質は微妙である。
軍事会議では些かの揉め事があった。それは『顔良が独断で自由に動けるようにすべきでない』という意見と、反対意見だ。結局反対意見が通ったのだが、呂嬰はこれが袁紹の判断ミスとなるだろうと見ていた。

理由は、ぱっと見た顔良の性格から、彼は匹夫の勇であると見抜いたから。

「……さて……、逃げる準備はしておくか。」

呂嬰は前を歩く兵に気づかれない程の声で呟いた。

辺りは暗闇。
月も出ないような夜だ。

顔良はずんずん進んで行く。早速向こうの軍とぶつかるつもりだろう。彼は周りの意見をあまり聞こうとしていなかった。
白馬城へ向かい、そこで一戦交えるが吉と顔良は言うが、それでは曹操軍に勝てるはずはない。何せ、向こうも精鋭揃いなのだ。特に軍師の力は素晴らしい。何か策を用いられることは考えていないのだろうかと呂嬰はため息をつく。

・・・・・・・・・・・・・・・

「…顔良将軍…。こんなことは余計な世話かもしれないが、このままでは孤立してしまうのではないか？」

今、呂嬰達は戦の最前線で戦っている。暗さに目が慣れてきたとは言っても、かなり周囲を把握するのは難しい。
そんな中、戦っている兵達の隙間をぬって、前線で槍を奮う顔良の近くまで行き、呂嬰は声を上げた。

「黙っていろ！儂がいれば負けることはない！
故に孤立など恐るるに足りん！」

全く話を聞いてもらえない。呂嬰はとりあえず、孤立しても死ぬことはないように、顔良の近くで戦うことにした。それは、顔良の言葉へのちょっとした嫌みであった。

どのくらい時間がたっただろうか。こちらの兵は圧倒的に多く、負けることはないと思わせる程である。
呂嬰はかかってきた敵を吹っ飛ばしながら生き残っている。

「…息の根を止めないことには無意味か…。」

いい加減うんざりしてきている呂嬰。
周囲を見渡すと、問題なくこちらが優勢のようだった。このまま終わってくれれば有り難い。そう呂嬰が思ったとき……、呂嬰には見えた。
向こうから袁紹軍を薙ぎ倒す者が来るのを。

「儂が叩っ切ってくれるわ！」

呂嬰の脇を顔良が馬で駆け上がって行く。生き残った兵も彼に続いて暗闇に消えて行った。呂嬰はあまりの展開の早さに瞬きをしたまま、固まっている。

奥の暗闇から悲鳴や雄叫びだけが聞こえる状態。呂嬰は彼等に置いて行かれては面倒だと、屍を跨ぎながらの歩いて行った。
死体は暗くてよく見えない。極力踏まないように歩いていくが、何かに躓いたり踏んだりと、若干コケながら前に進んで行く…。

漸く追いついた時、そこには兵が一人も立っていなかった。
呂嬰は我が目を疑った…。今の今まで生きていた数百の兵が皆、地面に顔を埋めている。

立っているのは馬に乗っている顔良と、暗闇で見えない馬に跨がった者。

かなりの沈黙の後、お互いが得物を振り落とした…。その時…、顔良の頭が胴体と離れ…地面に落ちた…。

この状況で暗闇であることを幸いであったと思える程、気持ちに余裕がある呂嬰。

だが顔良を打った者が、今度は呂嬰に向かって歩いて来るのを見て、彼女を纏う空気が張り詰めた。

・・・

が雲から顔を出し初めていた。その明かりは馬に跨がった男を照らし出す。

「っ！」

呂嬰は息を呑んだ。大きく目を見開き、些か固まった。

「…！！
呂嬰殿か！？」

馬に跨がった男も呂嬰に気づいたようだ。月明かりが闇の中から完全に二人を写し出した。

「…関羽殿…。」

呂嬰はその男の名を呼んだ。まさかこんなところで会うとは思いもよらなかった。確かに、彼がここに来ないはずがないとは薄々思っていた。しかし、会うとは思っていなかったのだ。なにせ、白馬城周辺は広い。しかも戦場。まさかの再会を誰が予想出来ようか。

「何故このような場所に…」

関羽も相当驚いている様子だ。これに関しては説明するまでもなく分かってもらえるだろう。史書家である呂嬰が戦場にいるからだ。

「…自分は史書を書く事が仕事。真実を見るのに越したことはないだろう。」

それに対して、呂嬰は史書家である自分がここにいることが当たり前だと思っているようだ。

「だからと言って…。
貴殿は戦えないのではなかったか？ここは戦場なのだ。戦えない者が来る場所ではない。」

関羽は厳しい表情で呂嬰を見下ろす。
あの日の一件で、関羽は呂嬰が戦えないことを知っていた。そして、戦場の過酷さも知っている。だからこそ、軽率に見える呂嬰の行動は快く思えないのだった。

「…自分はこの仕事に命を懸けている。貴殿等と一緒だ。武が無くとも戦場へ行き、賭けなければいけないなら命くらいかける。」

呂嬰は関羽の威圧に威圧で返した。
絶対に曲げない意志を目に映し関羽を見る呂嬰に、関羽は何を言っても無駄であると感じた。またそれと同時に、これ以上言っても逆

効果であると思った。そして、その覚悟に対して失礼だと思ったのだった。

関羽は大きくため息をついた。

「呂嬰殿…。ところで貴殿は今の貴殿の状況を理解しておられるか？」

急に話を変えた関羽の意図が分からず、呂嬰はキョトンとした表情を見せた。

「顔良は拙者が討ち取った。顔良軍に同行している貴殿は捕縛されたようなものだ。」

「…捕縛…。自分が貴殿にか。」

「…そうだ。だから貴殿には拙者と共に曹操殿のもとへ下ってもらう。」

「……仕方ない。」

「……

…貴殿の事だ。曹操軍に下っても再び戦にでるつもりだろう？」

「…無論だ。」

「ならば、自分の身は自分で護らなければならなくなる。でなけれ

ば、命を懸けているその仕事を永く続けられまい。」

「……」

その点については呂嬰も異議はないらしい。そもそも、今の呂嬰の武では激しさを増すこの乱世を生き抜くには些か厳しいと、彼女自身限界を感じていた。
更に、侍女の件もあり、自分の武の在り方を見直したいと考えていた呂嬰だった。

「そこで提案なのだが…、貴殿が曹操軍に下れば、時間が許す限り貴殿に拙者が稽古をつけよう。」

「……これは…喜ぶべきだろうな。」

呂嬰は少し考えてから、自分の右手に持たれた長物を見た。

さて、関羽がこの提案をしたのは、彼女が曹操軍に下らないのではないかと思ったからではない。なぜなら、彼女は川の流れるように時代の流れに身を任す人間だと知っていたからだ。
それなのに関羽は何故この提案をしたかと尋ねられれば、ただ犬死ににさせるには惜しい人材だと感じたからという答えに限るだろう。

そんなやり取りをしていると、関羽の後からまた馬に乗った男の影が表れた。

「関羽殿、そろそろ戻りましょう……ん？
貴女は確か…呂嬰殿？
何故こんな場所に……」

表れたのは張遼であった。彼もまた馬に跨がり、最初に会った時の風格そのままの威厳が見て取れる。

白馬城にはどうやら二人で来たらしい。

「…張遼殿か。今日は大物に良く会うな。」

驚く張遼に、呂嬰は包拳してそう言った。

「今から呂嬰殿を連れて陣に戻ろうと思う。戻ってからいろいろと説明しよう。」

関羽は現状を理解できていない張遼に向かってそう言うと、呂嬰に目を戻した。

「曹操軍へはどうやって行くつもりか？」

その関羽の言葉は、それなりに自尊心のある呂嬰への配慮だった。

「…それ程遠くもない。こちらの兵もいないし、周辺の戦は終わったようなものだろう。
…自分は歩いて行く。」

「そうか。承知した。
見張りには貴殿の事を伝えおこう。」

呂嬰の判断に反論しようとした張遼を制し、関羽は偃月刀を一振りしてそう言った。

関羽は馬を翻させ、元来た道を戻っていく。
対して、張遼は呂嬰をじっと見ている。

「…何か？」

「……いや、肝の座った御仁だと思っただけです。
…今日は月が隠れる。気をつけて。」

「…御丁寧に…どうも。」

呂嬰は軽く頭を下げた。

それを見てから、張遼も関羽の後を追って行った。

張遼の表情はあまり変わらず、心情を解するのは難しい。呂嬰も人の事を言えた立場ではないが、彼はよくわからないなと思う呂嬰であった。

・・・

事に神経を向けた。

袁紹軍に居たために麻痺をしているのだろうが、兵が別格な程少なく感じる。

だが、袁紹軍とは違うものを感じる。それは勢いとか忠誠心とかそういった類のものだ。

「…曹操は好かないが、いい軍だ…。」

「なにか？」

「…いや、何でもない。」

呂嬰は真っ直ぐ曹操のいる建物を見た。

《参》（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございました！
いかがでしたでしょうか？かなり雑になってきた感が否めない今日この頃。皆さんの感想などを頂けると嬉しいです！

では、次回もよかったら読んでやって下さい。きっちょむでした～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5110s/

…旅人…

2012年1月15日00時50分発行